特63
894

古今集

明治
43.11.2
内交

袖珍文庫發刊の主旨

明治の文明は漸く膚淺の境を脱せんとして居る。米を食ひ肉を食へば生きて居られると云陋劣な時代は去つて、書を以て靈を養はれば生きて居れぬと云向上の時代に入つた。明治の文明が眞に輝くのはこれからである。

現下の讀書界は一方に泰西の奔放なる新思想を味ふと共に一方に自國の過去に於ける產物を新しき眼を以て親ひつゝある。この後者の要求に應じてこゝ數年來盛んに古書の飜刻が起つた。視すべくはあるが、その飜刻書はいづれも大冊で裝釘も立派である爲に高價であり、且つ大抵は豫約出版法を取るが爲に購讀が手輕く出來ぬのが缺陷である。

泰西にはカッセル、レクラム等云書肆があつて、どんな名著でも極めて簡素な小冊子にして極めて廉價に販賣する。屋根裏に住む貧書生でも自由にこれを

購讀し、紳士も携帶に便なるを喜んで旅行でもする際は必ずこれを袖にする。

弊院が袖珍文庫を發刊するのは日本のカッセルとして立つたのである。古典と云はず輕文學といはず、雅といはず俗といはず、韻文といはず散文といはず過去の日本が產出したる文藝作物の一切はもとより、必ずしも本邦を範圍とせず漢籍中必讀のものをも選み、必ずしも文藝を範圍とせず經世修養其他の書をも選み、いづれも二十五錢均一の袖珍本に裝釘して、弘く讀書界に提供し、以て現下の缺陷を補はむとするのである。その假名漢字の鹽梅等に留意して現代の讀者諸彥に便した事、校訂を最嚴密にした事などはこの文庫の特色と自信する。

明治四十三年六月

三敎書院主識

古今集解題

解題

古今集、正しくは古今和歌集といふ。勅撰集の最初のもので、卷數二十、歌の數千百餘首ある。この書の著れる前は暫く漢詩文のみ幅を利かせて、和歌などは今の情歌の少し品の宜いもの位に見做されて居た。然るに國民は自覺した、支那の文藝の外に日本の文藝の在るべきを悟つた。醍醐天皇は自らも歌人に在し、有力なる和歌の保護者であらせられた。慨然として未曾有なる歌集勅撰の事業を思召し立ち、大內記紀友則、御書所預紀貫之、前甲斐目凡河內躬恒、右衛門府生壬生忠岑に勅し、歌集編輯の事を命じられた。斯くて延喜五年四月十八日に撰成り、こゝに和歌の勢力は永く社會に重きをなすに至つたのである。四季を通じてたゞ煦々たる春光あるが如き平安朝の空氣はこの古今集に依て吸ふことが出來る。

古今和歌集

序

やまと歌は人の心を種として萬の言の葉とぞなれりける。世の中にある人ことわざしげきものなれば、心に思ふ事を見る物聞く物につけて、いひ出せるなり。花になく鶯、水にすむ蛙の聲をきけば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をもいれずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をも哀と思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。この歌天地の開けはじまりける時より出來にけり。しかはあれども世に傳はる事は久方の天にしては下照姫にはじまり、あらがねの地にしては、素盞嗚尊よりぞ起りける。ちはやふる神代には歌の文字も定まらず、すなほにして、こ

との心分きがたかりけらし。人の世となりてぞ三十文字あまり一もじはよみける。かくてぞ花をめで、鳥をうらやみ、霞をあはれび露を悲しぶ心詞多くさまぐになりにけろ。遠き所も出立つ足もとより始まりて、年月をわたり、高き山も麓の塵土よりなりて、天雲たなびくまで、おひのぼれる如くに此歌もかくの如くなるべし。難波津の歌は帝の御始なり。淺香山の言の葉は采女の戯より詠みて、このふた歌は歌の父母のやうにてぞ手習ふ人の始にもしける。そもく歌のさま六つなり。唐の歌にもかくぞあるべき。其六種の一つには、そへうた、二つには、かぞへうた、三つには、なずらへうた、四つには、たとへうた、五つには、たゞごとうた、六つには、いはひ歌なり。今の世の中色につき、人の心花になりにけるより、あだなる歌、はかなきことのみ出で來れば、色このみの家に埋木の人しれ

ぬ事となりて、まめなる所には花薄穂に出すべき事にもあらずなりにたり。其始を思へば、かゝるべくなむあらぬ。いにしへの代々の帝、春の花のあした、秋の月の夜毎に、さふらふ人々をめして事につけつつ歌を奉らしめ給ふ。あるは花をもてあそぶとて、たよりなき所にまどひ、あるは月を思ふとて、しるべなき闇にたどれる心々を見たまひて、さかしおろかなりとしろしめしけむ。しかあるのみにあらず、さゞれ石にたとへ、筑波山にかけて君を願ひ、よろこび身にすぎ、たのしび心にあまり、富士の煙によそへて人を戀ひ、松虫の音に友を忍び、高砂、住の江の松も相生のやうに覺え、男山の昔を思ひいで、女郎花の一時をくれるにも、歌をいひてぞなぐさめける。又春のあしたに花のちるを見、秋の夜に木の葉の落るをきゝ、あるは年毎に鏡の影に見ゆる雪と波とを歎き、草の露、水の泡を見て我身を歎き、

あるは昨日は榮えおごりて、けふは時を失ひ、世に佗びて親しかりしも疎くなり、あるは松山の波をかけ野中の水をくみ、秋萩の下葉をながめ曉の鴫のはねがきをかぞへ、あるは、吳竹のうきふしを人にいひ、吉野川をひきて、世の中を恨みきつるに、今はふじの山も煙たゝずなり、長柄の橋もつくるなりと聞く人は歌にのみぞ心をなぐさめける。いにしへよりかく傳はるうちにも、奈良の御時よりぞひろまりにける。かの御世や歌の心を知ろしめしたりけむ、かの御時にあひて、柿本の人麻呂なむ歌のひじりなりける。これは君も人も身を合せたりといふなるべし。秋の夕べ龍田川に流るゝ紅葉をばみかどの御目に錦と見給ひ、春のあした吉野山の櫻は人麻呂が心には雲かとのみなむ覺えける。又山部の赤人といふ人ありけり。歌にあやしくたへなりけり。人麻呂は赤人が上に立たむ事難く、赤人は人麻呂が下

に立たむ事難くなむありける。此人々をおきて又すぐれたる人も吳竹の世々に聞え、片糸のよりくに絶えずぞありける。これよりさきの歌を集めてなむ萬葉集となづけられたる。かの御時よりこのかた年は百年にあまり世は十とさぎになむなりにける。こゝにいにしへの事をも、歌の心をも知れる人わづかにひとりふたりなりき。しかはあれど、これかれ得たる所得ぬ所、たがひになむある。今、此事をいふに、官位高き人をば、たやすきやうなればいれず。其外に其名聞えたる人は、すなはち僧正遍昭は歌のさまは得たれども、誠すくなし。たとへば、畫にかける女を見て徒に心を動かすが如し。在原業平は其の心あまりて詞たらず、しぼめる花の色なくて、にほひ殘れるが如し。文屋康秀は詞はたくみにて其さま身におはず。いはゞ商人のよき衣着たらむが如し。宇治山の喜撰は詞かすかにして、はじ

めをはりたしかならず。いはゞ、秋の月を見るに曉の雲にあへるがごとし。よめる歌、おほくきこえねば、かれこれをかよはして、よくしらず。小野小町は其心あはれにて姿つよからず。いはゞ　よき女のなやめる所あるに似たり。つよからぬは女の歌なればなるべし。大伴黒主は心おかしくてそのさまいやし。いはゞ、薪負へる山人の花の蔭にやすめるが如し。此外の人々其の名聞ゆる、野べにおふるかづらの延廣ごり、林に茂き木の葉の如くに多かれど、歌とのみ思ひて、其のさましらぬなるべし。かゝるに今天皇の天の下しろしめす事、四の時九かへりになむ成りぬる。あまれき御うつくしみの波八島の外まで流れ、廣き御惠の陰、筑波山の麓よりも繁くおはしまして、萬のまつりごとをきこしめす暇、もろもろの事をすて給はぬあまりに、古の事をも忘れじ、ふりにし事をもおこし給ふとて、

今も見そなはし後の世にも傳はれとて、延喜五年四月十八日に、大内記紀友則、御書所預紀貫之、前甲斐目凡河内躬恒、右衛門府生壬生忠岑等に仰せられて、萬葉集に入らぬふるき歌、みづからのをも奉らしめ給ひてなむ。それが中にも梅をかざすよりはじめて、郭公をきゝ、紅葉を折り、雪を見るにいたるまで、又鶴亀につけて君を思ひ、友をいはひ、秋萩、夏草を見て妻をこひ、逢坂に到りてたむけを祈り、あるは、春夏秋冬にもいらぬ、くさぐさの歌をなむ撰ばせ給ひける。すべて千歌二十卷、名づけて古今和歌集といふ。かく、このたびあつめ撰ばれて、山した水のたえず、濱のまさごのかずおほくつもりぬれば、今は明日香川の瀬になるうらみも聞こえず。さゞれ石の巖となるよろこびのみぞあるべき。我等拙き言葉は春の花にほひすくなくして、むなしき名のみ、秋の夜の長きをかこて

れば、かつは、人の耳におそり、かつは歌の心にはぢ思へど、たなびく雲の立居、啼鹿の起臥は、貫之等が、此世におなじく生れて、この事の時にあへるをなむよろこびぬる。人麿なくなりにたれど、歌のことゝはまれるかな。たとひ、時うつり事さり、たのしび悲しびゆきかふとも、この歌もし青柳の糸絶えず、松の葉の散り失せずしてまさきのかづら長くつたはり、鳥の跡久しくとゞまれらば、歌のさまをも知り、ことのこゝろを得たらむ人は、大空の月を見るが如くに、古を仰ぎて今をこひざらめかも。

巻一

春歌上

ふる年に春立ちける日よめる　在原元方

年のうちに春は來にけり一年を去年とやいはむ今年とやいはむ

春立ちける日よめる　紀貫之

袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風や解くらむ

題しらず　讀人しらず

春がすみたてるやいづくみよしのゝ吉野の山に雪はふりつゝ

二條后の春の始の御歌

雪のうちに春は來にけり鶯のこほれる涙今や解くらむ

題しらず　讀人しらず

梅が枝に來居るうぐひす春かけて啼けどもいまだ雪は降りつゝ

雪の木に降りかゝれるをよめる　素性法師

春たてば花とや見らむ白雪のかゝれる枝にうぐひすのなく

題しらず　讀人しらず

こゝろざし深くうめてしをりければ消えあへぬ雪の花とみゆらむ

〔或人のいはくさきのおほきおほいまうちぎみの歌也〕

二條后の、東宮の御息所ときこえける時、正月三日御前に召して仰言あるに、日は照りながら雪の頭に降りかゝりけるをよませ給ひける　文屋康秀

春の日のひかりにあたる我なれどかしらの雪となるぞわびしき

雪の降りけるをよめる　紀貫之

霞たちこのめも春の雪ふれば花なき里も花ぞ散りける

春の始によめる　藤原言直

春や疾き花やおそきと聞きわかむ鶯だにも啼かずもあるかな

春のはじめの歌　壬忠岑

春來きぬと人はいへども鶯のなかぬかぎりはあらじとぞ思ふ

寛平の御時后の宮の歌合の歌　源當純

谷風に解る氷のひま毎にうち出づる波や春のはつ花

紀友則

花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯誘ふしるべには遣る

大江千里

鶯の谷よりいづる聲なくば春來ることを誰か知らまし

春たてど花もにほはぬ山里は物うかる音にうぐひすぞ鳴く　在原棟梁

題しらず　讀人しらず

野べ近く家ゐしをればうぐひすのなくなる聲は朝な〳〵聞く

春日野はけふはな燒きそ若草の妻も籠れり我も籠れり

春日野の飛火の野守いでゝ見よ今いくかありて若菜摘みてむ

み山には松の雪だに消えぬくに都は野べの若菜摘みけり

梓弓おして春雨けふ降りぬ明日さへ降らば若菜摘みてむ

仁和のみかど親王におはしましける時に、人

に若菜たまひける御歌

君がため春の野にいでて若菜つむ我が衣でに雪は降りつゝ

歌奉れと仰せられし時詠みて奉れる　貫之

春日野の若菜摘みにや白妙の袖ふりはへて人の行くらむ　在原行平朝臣

題しらず

春の着る霞の衣縫をうすみ山風にこそ亂るべらなれ

寛平御時、后の宮の歌合によめる　源宗于朝臣

常磐なる松のみどりも春來れば今ひとしほの色まさりけり

歌奉れと仰せられし時詠みて奉れる　貫之

わが背子が衣ほるさめ降る毎に野べのみどりぞ色まさりける

青柳の糸縒りかくる春しもぞ亂れて花のほころびにける

西大寺のほとりの柳をよめる　僧正遍昭

あさみどり糸よりかけて白露を玉にも貫ける春の柳か

題しらず　讀人しらず

百千鳥さへづる春は物ごとにあらたまれども我ぞふりゆく

遠近のたづきも知らぬ山なかにおぼつかなくも呼子鳥かな

雁の聲を聞きて越へまかりける人を思ひて

よめる　　凡河内躬恒

春くれば雁かへるなり白雲の道ゆきぶりに言や傳てまし

歸る雁をよめる　　伊勢

春霞たつを見捨てゝ行く雁は花無き里に住みやならへる

題しらず　　讀人しらず

折りつれば袖こそ匂へ梅の花ありとやこゝに鶯のなく

色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも

宿近く梅の花植ゑじあぢきなく待つ人の香にあやまたれけり

梅の花立寄るばかりありしより人の皆むる香にぞしみける

梅の花を折りてよめる　　東三條左の大臣

うぐひすの笠に縫ふてふ梅の花折りてかざゝむ老隱るやと

題しらず　　素性法師

よそにのみあはれとぞ見し梅の花飽かぬ色香は折りてなりけり

梅の花を折りて人におくりける　　友則

君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る

くらぶ山にてよめりける　　貫之

梅の花咲きぬる時はくらぶ山闇に越ゆれど著くぞありける

月夜に梅の花を折りてと人のいひければ、

折るとてよめる　　躬恒

月夜にはそれとも見えず梅の花香を尋ねてぞ知るべかりける

春の夜、梅の花をよめる

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隱る〜

初瀬に詣づる毎に宿りける人の家に久しく宿らで、程經て後に至れりければ、かの家のあるじ、かく判かになむ宿りはあるゝといひ出だして侍りければそこにたてりける梅の花を折りてよめる　貫之

人はいさ心も知らず故郷は花ぞ昔の香に匂ひける

水の邊に梅花の咲けりけるを詠める　伊勢

春ごとに流るゝ川を花と見て折られぬ水に袖や濡れなむ

年を經て花の鏡となる水は散りかゝるをや曇るといふらむ

家にありける梅の花散りけるをよめる　貫之

暮るとあくとめかれぬ物を梅の花いつの人間にうつろひぬらむ

寛平御時、后の宮の歌合の歌　讀人しらず

梅が香を袖に移してとゞめてば春は過ぐとも記念ならまし

散るを見てあるべきものを梅の花うたてにほひの袖にとまれる　素性法師

題しらず

散りぬとも香をだに殘せ梅の花戀しき時の思ひ出でにせむ　讀人しらず

人の家に植ゑたりける櫻の花咲きはじめたりけるを見てよめる　貫之

今年より春知りそむる櫻花散るといふ事は習はざらなむ

題しらず　讀人しらず

山高み人も遊めぬ櫻花いたくなわびそわれ見はやさむ

〔又は、里とほみ人もすさめぬ山櫻〕

山さくらわが見に來れば春がすみ峯にも尾にも立隠しつゝ

染殿の后の御前に花瓶に櫻の花をさゝせ給へるを見てよめる　前太政大臣

年經れば齡は老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし

渚の院にて櫻を見てよめる　在原業平朝臣

世の中に絶えて櫻の無かりせば春の心はのどけからまし

題しらず　讀人しらず

いはばしる瀧なくもがな櫻花手折りても來む見ぬ人のため

山の櫻を見てよめる　素性法師

見てのみや人にかたらむ櫻ばな手ごとに折りて家づとにせむ

花さかりに京を見やりてよめる

見渡せば柳櫻をこき交ぜて都ぞ春の錦なりける

櫻の花のもとにて、年の老いぬることを歎きて　紀友則

よめる

色も香も同じ昔に咲くらめど年經る人ぞあらたまりける

折れる櫻をよめる　貫之

誰しかも認めて折りつる春がすみ立ちかくすらむ山の櫻を

歌奉れと仰せられし時詠みて奉れる

櫻花咲きにけらしも足曳の山の峽より見ゆる白雲

寛平御時、后の宮の歌合の歌　友則

みよし野の山べに咲ける櫻花雪かとのみぞ誤たれける

三月に閏月の有りける年詠みける　伊勢

櫻花春加はれる今年だに人の心に飽かれやはする

櫻の花の盛りに久しく訪はざりける人の、

來たりける時に詠みける　讀人しらず

あだなりと名にこそ立てれ櫻花年に稀なる人も待ちけり

かへし　業平朝臣

今日來ずは明日は雪とぞ降りかまし消えずはありとも花と見ましや

題しらず　讀人しらず

散りぬれば戀ふれど驗無き物を今日こそ櫻折らば折りてめ

折り取らば惜しげにもあるか櫻花いざ宿かりて散るまでは見む

櫻色に衣は深く染めて着む花の散りなむ後の形見に　紀ありとも

櫻の花の咲けりけるを見にまうできたりける人に詠みておくりける　躬恒

我が宿の花見がてらに來る人は散りかむ後ぞ戀しかるべき

亭子院の歌合の時よめる　伊勢

見る人もなき山里の櫻ばな外の散りなむ後ぞ咲かまし

卷二

春歌下

題しらず　讀人しらず

春霞たなびく山の櫻花うつろはむとや色かはりゆく

待てといふに散らでし留る物ならば何を櫻に思ひまさまし

殘り無く散るぞめでたき櫻花ありて世の中果の憂ければ

此の里に旅寢しぬべし櫻花散りのまがひに家路忘れて

うつ蟬の世にも似たるか花ざくら咲くと見し間にかつ散りにけり

僧正遍昭に詠みておくりける　惟喬親王

櫻花散らば散らなむ散らずとて故里人の來ても見むに

雲林院にて櫻の花の散りけるを見てよめる

櫻散る花のところは春ながら雪ぞ降りつゝ消えがてにする　そうぐ法師

櫻の花の散り侍りけるを見て詠みける　素性法師

花散らす風の宿りは誰か知る我に教へよ行きて恨みむ

雲林院にて櫻の花をよめる　由性法師

いざ櫻我も散りなむ一盛りありなば人にうきめ見えぬむ

あひ知れりける人のまうできて歸りにける

後によみて花にさしてつかはしける　貫之

ひとめ見し君もや來るとさくら花けふは待ちみて散らば散らなむ

山の櫻を見てよめる

はる霞なに隱すらむ櫻花散る間をだにも見るべきものを

心地そこなひてわづらひける時に風にあたらじと
ておろし籠めてのみ侍りける間に折れる櫻の散り
がたになれりけるを見てよめる　藤原のよるかの朝臣

垂れ籠めて春のゆくへも知らぬ間に待ちし櫻もうつろひにけり

東宮の雅院にて櫻の花のみがは水に散りて
流れけるを見てよめる　菅野高世

枝よりもあだに散りにし花なれば落ちても水の泡とこそなれ

櫻の花の散りけるをよめる　貫之

ことならば咲かずやはあらぬ櫻花見る我さへにしづ心なし

櫻の如疾く散る物はなしと人のいひければ詠める

さくら花疾く散りぬとも思ほえず人の心ぞ風も吹きあへぬ

さくらの花の散るをよめる　紀友則

久方の光りのどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ

東宮の帯刀の陣にて櫻の花の散るをよめる　藤原良風

春風は花のあたりを避きて吹け心づからやうつろふと見む

櫻の散るをよめる　凡河内躬恒

雪とのみ降るだにあるをさくら花いかに散れとか風の吹くらむ

比叡に登りて歸りまうできて詠める　貫之

山高み見つゝ我が來しさくら花風は心に任すべらなり

題しらず　大伴黒主

春雨のふるは涙かさくら花ちるを惜しまぬ人し無ければ

亭子院の歌合の歌　貫之

さくら花散りぬる風の名殘には水なき空に浪を立ちける

ならのみかどの御歌　　良岑宗貞

故里となりにし奈良の都にも色はかはらず花は咲きけり

春の歌とてよめる

花の色は霞に籠めて見せずとも香をだに盗め春の山風

寛平御時后の宮の歌合の歌　　素性法師

花の木は今は掘り植ゑじ春たてばうつろふ色に人習ひけり

題しらず　　讀人しらず

春の色の至り至らぬ里はあらじ咲ける咲かざる花の見ゆらむ

春の歌とてよめる　　貫之

三輪山をしかも隠すか春がすみ人に知られぬ花や咲くらむ

雲林院の皇子のともに花見に北山のほとり

にまかれりける時によめる　　素性

いざけふは春の山べに惑ひなむ暮れなば等閑の花の陰かは

春の歌とてよめる

いつまでか野べに心のあくがれむ花し散らずば千代も經ぬべし

題しらず　　讀人しらず

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことは命なりけり

花の如世のつれならば過ごしてし昔はまたも歸り來なまし

吹く風にあつらへつくる物ならばこの一枝は避きよといはまし

待つ人も來ぬものゆゑに鶯のなきつる花を折りてけるかな

寛平御時きさいの宮の歌合の歌　　藤原興風

さく花は千種ながらにあだなれど誰かは春をうらみはてたる

春がすみ色の千種に見えつるはたなびく山の花のかげかも

霞たつ春の山べは遠けれど吹きくる風は花の香ぞする　在原元方

うつろへる花を見てよめる

花みれば心さへにぞ移りける色には出でじ人もこそ知れ　躬恒

題しらず

鶯のなく野べ毎に來て見ればうつろふ花に風ぞ吹きける　讀人しらず

吹く風を泣きて怨みよ鶯は我やは花に手だに觸れたる　典侍洽子朝臣

散る花の泣くにし止るものならばわれ鶯に劣らましやは

仁和の中將の御息所の家に歌合せむとし

ける時によめる　藤原俊蔭

花の散る事やわびしき春霞立田の山の鶯の聲

鶯の鳴くをよめる　素性

鶯のおのが羽ぶきに散る花を誰におほせてこゝら鳴くらむ

鶯の花の木にて鳴くをよめる　躬恒

驗なき音をも鳴く哉鶯の今年のみ散る花ならなくに

題しらず　讀人しらず

駒並べていざ見に行かむ古里は雪とのみこそ花は散るらめ

散る花を何か恨みむ世の中に我が身もともにあらむものかは　小野小町

花の色はうつりにけりな徒に我が身世にふるながめせしまに

仁和の中將のみやすん所の家に歌合せむと

しける時によめる　素性

惜しと思ふ心は糸に縒られなむ散る花毎に貫きてとゞめむ

志賀の山越に女の多くあへりけるによみて

遣はしける　　貫之

あづさゆみ春の山べを越えくれば道もさりあへず花ぞ散りける

寛平御時、きさいの宮の歌合の歌

春の野に若菜摘まむと來しものを散りかふ花に道はまどひぬ

山寺にまうでたりけるに詠める

宿りして春の山邊に寢たる夜は夢のうちにも花ぞ散りける

寛平御時、きさいの宮の歌合の歌

吹く風と谷の水とし無かりせばみやまがくれの花を見ましや

志賀より歸りける女どもの花山に入りて藤の花の下に立ちよりて歸りけるに詠みて送りける

僧正遍昭

よそに見て歸らむ人に藤の花賓緣はれよ枝は折るとも

家に藤の花咲けりけるを人の立留りて見けるをよめる　　躬恒

わが宿に咲ける藤浪立ちかへり過ぎ難てにのみ人の見るらむ

題しらず　　讀人しらず

今もかも咲き匂ふらむ橘の小島の崎の山吹の花

春雨に匂へる色もあかなくに香さへなつかし山吹の花

山吹はあやなし咲きそ花見むと植ゑけむ君が今宵來なくに

吉野川の邊に山吹の咲けりけるをよめる　　貫之

吉野川岸の山吹吹く風に底の影さへうつろひにけり

題しらず　　讀人しらず

かはづなく井手の山吹散りにけり花の盛りに逢はましものを

〔此歌は或人のいはく橘のきよともが歌なり〕

春の歌とてよめる　素性

思ふどち春の山邊に打群れて其處ともいはぬ旅寢してしが

春のとく過ぐるをよめる　躬恒

梓弓春立ちしより年月の射るが如くも思ほゆるかな

彌生に鶯の聲久しく聞えざりけるをよめる　貫之

鳴き留むる花し無ければ鶯も果ては物憂くなりぬべらなり

彌生の晦日方に山を越えけるに山川より花の流れけるをよめる　深養父

花散れる水のまに〳〵尋め來れば山には春も無くなりにけり

春を惜みてよめる　元方

惜めども留まらなくに春霞かへる道に立ちぬとおもへば

寛平御時、きさいの宮の歌合の歌　興風

聲絶えず鳴けや鶯ひと〻せに再びとだに來べき春かは

彌生のつごもりの日花つみより歸りける女どもを見てよめる　躬恒

留むべきものとは無しに果敢くも散る花毎にたぐふ心かな

彌生のつごもりの日雨の降りけるに藤の花を折りて人に遣はしける　業平朝臣

濡れつ〻ぞ強ひて折りつる藤の花春は今日をし限りと思へば

亭子院の歌合に春のはての歌　躬恒

今日のみと春を思はぬ時だにも立つこと易き花のかげかは

卷三

夏歌

題しらず　　讀人しらず

わが宿の池の藤なみ咲きにけり山杜鵑今や來鳴かむ

〔此歌はある人のいはく柿本の人麿が歌なり〕

卯月に咲ける藤を見てよめる　　紀とし貞

あはれてふ事をあまたに遣らじとや春におくれて獨咲くらむ

題しらず　　讀人しらず

五月待つ山時鳥うち羽ぶき今も鳴かなむ去年の古聲

さつき來ば鳴きも古りなむ時鳥まだしき程の聲を聞かばや　　伊勢

さつき待つ花橘の香を嗅げば昔の人の袖の香ぞする　　讀人しらず

いつのまに五月來ぬらむ足引のやま時鳥今ぞ鳴くなる

今朝來鳴き未だ旅なるほとゝぎす花橘に宿はからなむ

音羽山を越えける時に郭公のなくを聞きて詠める　　紀友則

音羽山今朝越えくれば時鳥梢はるかに今ぞ鳴くなる

郭公の初めて鳴けるを聞きてよめる　　素性

時鳥鳴く聲聞けばあぢき無く主定まらぬ戀せらるはた

奈良の石のかみ寺にて郭公の鳴くを詠める

いそのかみ古き都の時鳥聲ばかりこそ昔なりけれ

題しらず　　讀人しらず

夏山に鳴くほとゝぎす心あらば物思ふわれに聲な聞かせそ

時鳥鳴く聲聞けばわかれにし古里さへぞ戀しかりける

時鳥汝(な)が鳴く里の數多あれば猶疎まれぬ思ふものから

思ひ出づるときはの山の時鳥唐紅(からくれなゐ)の振り出てぞ鳴く

聲はして涙は見えぬほとゝぎす我が衣手の沾(ひ)づた借らなむ

足引の山ほとゝぎすをり延(は)へて誰かまさると音をのみぞ鳴く

今さらに山へ歸るなほとゝぎす聲の限りはわが宿に鳴け

みくにのまち

やよや待て山時鳥ことづてむわれ世の中に住みわびぬとよ

寛平御時、きさいの宮の歌合の歌　紀友則

五月雨に物思ひをれば時鳥夜深く鳴きていづち行くらむ

夜や暗き道や惑へる時鳥我が宿をしも過ぎがてに鳴く

宿りせし花橘も枯れなくになど時鳥聲絶えぬらむ　大江千

夏の夜は臥すかとすれば時鳥鳴く一聲に明くるしの〳〵め　紀貫之

暮るゝかと見れば明けぬる夏の夜を飽かずとやなく山時鳥　壬生忠岑

夏山に戀しき人や入りにけむ聲振り立て〳〵鳴くほとゝぎす　紀秋岑(あきみね)

題しらず　讀人しらず

去年(こぞ)の夏鳴きふるしてし時鳥それかあらぬか聲の變らぬ

時鳥の鳴くを聞きてよめる　貫之

五月雨の空もとゞろに時鳥何を憂しとか夜たゞ鳴くらむ

伺候にて男どもの酒たうべけるに召して時鳥待つ歌詠めとありければ詠める　躬恒

時鳥壁も聞えず山びこは外になく音を應へやはせぬ

山に時鳥の鳴きけるを聞きて詠める　貫之

時鳥人待つ山に鳴くなれば我うちつけに戀ひまさりけり

早く住みける所にて時鳥の鳴きけるを聞きて詠める　忠岑

昔べや今も戀しき時鳥故里にしも鳴きて來つらむ

時鳥の鳴きけるを聞きてよめる　躬恒

ほと、ぎす我とはなしに卯の花のうき世の中に鳴き渡るらむ

蓮の露を見てよめる　僧正遍昭

はちす葉の濁にしまぬ心もて何かは露を玉と欺く

月の面白かりける夜あかつき方によめる　深養父

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲の何處に月宿るらむ

隣より常夏の花を乞ひにおこせたりければ

惜みて此歌をよみて遣はしける　躬恒

塵をだに据ゑじとぞ思ふ咲きしより妹と我が寝る床夏の花

六月の晦日の日よめる

夏と秋と往きかふ空の通路はかたへ涼しき風や吹くらむ

巻三終

卷四

秋歌上

秋立日よめる　藤原敏行朝臣

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる

秋立つ日殿上人ども加茂の川原に川逍遙し

けり　供にまかりてよめる　貫之

川風の涼しくもあるか打寄する浪と共にや秋はたつらむ

題しらず　讀人しらず

我が背子が衣の裾を吹きかへしうらめづらしき秋の初風

昨日こそ早苗取りしか何時の間に稻葉戦ぎて秋風の吹く

秋風の吹きにし日より久かたの天の川原に立たぬ日は無し

久方の天の川原の渡守君渡りなば楫隱してよ

天の川紅葉を橋に渡せばや織女の秋をしも待つ

戀ひ〳〵て逢ふ夜は今宵天の川霧立ち渡り明けずもあらなむ

寛平御時、七日の夜殿上にさぶらふ男ども歌

奉れと仰せられける時、人に代りて詠めり　友則

天の川淺瀬しら浪迯りつゝ渡り果てれば明けぞしにける

同じ御時きさいの宮の歌合の歌　在原興風

契りけむ心ぞつらき棚機の年にひとたび逢ふは逢ふかは

七日の日の夜よめる　凡河内躬恒

年毎に逢ふとはすれど棚機の寢る夜の數ぞ少かりける

棚機に手向しつる糸のうちはへて年の緒長く戀ひやわたらむ

題しらず　素性

今宵來む人には逢はじ棚機の久しき程に宵もこそすれ

七日の夜曉によめる　源宗于朝臣

今はとて別るゝ時は天の川渡らぬ先きに袖ぞ沾ぢぬる

八日の日よめる　壬生忠岑

今日よりは今來む年の昨日をぞいつしかとのみ待ちわたるべき

題しらず　讀人しらず

木の間より漏り來る月の影見れば心づくしの秋は來にけり

大方の秋來るからに我が身こそ悲しきものと思ひ知りぬれ

我がために來る秋にしもあらなくに虫の音聞けば先づぞ悲しき

物毎に秋ぞ悲しきもみぢつゝうつろひゆくを限と思へば

獨寢る床は草葉にあらねども秋來る宵は露けかりけり

是貞の親王の家の歌合の歌

何時はとは時はわかれど秋の夜ぞ物思ふことの限なりける

雷の壺に人々集りて秋の夜惜む歌よみけるついでに詠める　躬恒

かくばかり惜しと思ふ夜を徒に寢てあかすらむ人さへぞ憂き

題しらず　讀人しらず

白雲に羽うちかはし飛ぶ雁の影さへ見ゆる秋の夜の月

さ夜中と夜は更けぬらし雁がねの聞ゆる空に月わたる見ゆ

是貞の親王の家の歌合によめる　大江千里

月見れば千々に物こそ悲しけれ我が身一つの秋にはあらねど

久方の月の桂も秋はなほ紅葉すればや照りまさるらむ　忠岑

月をよめる　　在原元方

秋の夜の月の光し明(あか)ければくらぶの山も越えぬべらなり

人の許にまかれりける夜、きりぐすの鳴きける

を聞きて詠める　　藤原たゝふさ

きりぐすいたくな鳴きそ秋の夜の長き思は我ぞまされる

是貞の親王の家の歌合のうた　　敏行朝臣

秋の夜の明くるも知らず鳴く虫は我が如(ごと)物や悲しかるらむ

題しらず　　讀人しらず

秋萩も色づきぬればきりぐすの我が寢ぬ如(ごと)や夜(よる)は悲しき

秋の夜は露こそ殊に寒からし叢(くさむら)ごとに虫のわぶれば

君しのぶ草に窶(やつ)るゝ古里はまつ虫の音ぞ悲しかりける

秋の野に道も惑ひぬ松蟲の聲する方に宿や借らまし

秋の野に人まつ虫の聲すなり我かと行きていざ訪(とぶら)はむ

もみぢ葉の散りて積れる我宿に誰をまつ虫こゝらなくらむ

蜩(ひぐらし)の鳴きつる共(なべ)に日は暮れぬと見えしは山の陰(かげ)にぞありける

ひぐらしの鳴く山里の夕暮は風より外に訪ふ人もなし

初雁をよめる　　在原元方

待つ人にあらぬものから初雁の今朝鳴く聲のめづらしきかな

是貞の親王の家の歌合の歌　　友則

秋かぜに初雁が音ぞ聞ゆなる誰が玉章をかけて來つらむ

題しらず　　讀人しらず

我が門に稻負(いなおほ)せ鳥の鳴くふべに今朝吹く風に雁は來にけり

いと早も鳴きぬる雁か白露の色どる木々も紅葉(もみ)ぢあへなくに

春霞かすみて去(い)にし雁がねは今ぞなくなる秋霧の上(うへ)に

衣か寒み衣かりがれ鳴くなべに萩の下葉もうつろひにけり

〔此歌はある人のいはく柿本の人麿が歌なりと〕

寛平御時きさいの宮の歌合の歌　藤原菅根朝臣

秋風に聲をほに上げて來る船は天の門渡る雁にぞありける

雁の鳴き渡るを聞きて詠める　躬恒

愛きことを思ひつらねて雁がねの鳴きこそわたれ秋の夜な〳〵

是貞の親王の家の歌合の歌　忠岑

山里は秋こそことにわびしけれ鹿の鳴く音に目を覺しつゝ

讀人しらず

奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の聲きく時ぞ秋は悲しき

題しらず

秋萩にうらぶれ居れば足曳の山下とよみ鹿の鳴くらむ

秋萩をしがらみふせて鳴く鹿の目には見えずて聲の亮さ

是貞の親王の家の歌合によめる　藤原敏行朝臣

秋萩の花咲きにけり高砂の尾の上の鹿は今や鳴くらむ

昔相知りて侍りける人の秋の野にて逢ひて物語しけるついでに詠める　躬恒

秋萩の古枝に咲ける花見ればもとの心は變らざりけり

題しらず　讀人しらず

秋萩の下葉色づく今よりや獨ある人の寢ねがてにする

鳴きわたる雁の涙や落ちつらむ物思ふ宿の萩の上の露

萩の露玉に貫かむと取れば消ぬよし見む人は枝ながら見よ

〔此歌は、ある人の曰く奈良の帝の御歌なりと〕

折りて見ば落ちぞしぬべき秋萩の枝も撓に置ける白露

萩が花散るらむ小野の露霜に濡れてを行かむ小夜は更くとも

是貞の親王の家の歌合に詠める　文屋朝康

秋の野に置く白露は玉なれや貫きかくる蜘蛛の絲筋

題しらず　僧正遍昭

名にめでゝ折れるばかりぞ女郎花我落ちにきと人に語るな

僧正遍昭が許に奈良へまかりける時に、男山にて女郎花を見て詠める　布留今道

女郎花憂しと見つゝぞ行き過ぐる男山にし立てりと思へば

是貞の親王の家の歌合の歌　敏行朝臣

秋の野に宿りはすべし女郎花名を睦じみ旅ならなくに

題しらず　小野美材

女郎花多かる野邊に宿りせばあやなくあだの名をや立ちなむ

朱雀院の女郎花合に詠みて奉りける　左大臣

女郎花秋の野風に打ち靡き心一つを誰によすらむ　藤原定方朝臣

秋ならで逢ふことかたき女郎花あまの川原に生ひぬものゆゑ　貫之

誰が秋にあらぬものゆゑ女郎花など色に出て夙うつろふ　躬恒

妻戀ふる鹿ぞ鳴くなる女郎花おのが住む野の花と知らずや

女郎花吹き過ぎて來る秋風は目には見えねど香こそ著けれ　忠岑

人の見る事や苦しき女郎花秋霧にのみ立ち隱るらむ

獨のみ眺むるよりは女郎花我が住む宿に栽ゑて見ましを

物へまかりけるに人の家に女郎花栽ゑたりけるを見て詠める　兼覽王

女郎花後めたくも見ゆる哉荒れたる宿に獨立てれば

寛平御時、藏人所のをのこども嵯峨野に花見にとてまかりける時に歸るとて皆歌よみけるついでに詠める　平貞文

花に飽かで何歸るらむ女郎花多かる野邊に寢なましものを

是貞の親王の家の歌合に詠める　敏行朝臣

何人か着て脱ぎかけし藤袴來る秋毎に野邊を匂はす

藤袴をよみて人に遣はしける　貫之

宿りせし人の記念か藤袴忘られ難き香に匂ひつゝ

藤袴を詠める　素性

主知らぬ香こそ匂へれ秋の野に誰が脱ぎかけし藤袴ぞも

題しらず　平貞文

今よりは植ゑてだに見じ花すゝき穗に出づる秋はわびしかりけり

寛平御時、きさいの宮の歌合の歌　在原棟梁

秋の野の草の秋か花すゝき穗に出でゝ招く袖と見ゆらむ

我のみやあはれと思はむ蟋蟀鳴く夕影の大和撫子　素性法師

題しらず　讀人しらず

綠なる一つ草とぞ春は見し秋はいろ〳〵の花にぞありける

百草の花の紐解く秋の野に思ひ戯れむ人な咎めそ

月草に衣は摺らむ朝露に觸れての後はうつろひぬとも

仁和の帝親王(みこ)におはしましける時、布留(ふる)の瀧
御覽ぜむとておはしましける道に、遍昭が母
の家に宿り給へりける時に、庭を秋の野に作
りて、御物語のついでに詠みて奉りける　僧正遍昭

里は荒れて人は古(ふ)りにし宿なれや庭も籬も秋の野らなる

卷四終

卷五

秋歌下

是貞のみこの家の歌合の歌　文屋康秀

吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風を嵐といふらむ

草も木も色かはれどもわたつ海の波の花にぞ秋無かりける

秋の歌合しける時詠める　紀淑望(よしもち)

紅葉せぬ常磐の山は吹く風の音にや秋を聞き渡るらむ

題しらず　讀人しらず

霧たちて雁ぞ鳴くなる片岡のあしたの原は紅葉しぬらむ

わが門の早田(わさだ)もいまだ刈上げぬにまだき紅葉(もみ)づる神なびの森

ちはやふる神なび山のもみぢ葉に思ひはかけじうつろふものを

貞觀の御時、綾綺殿の前に梅の木有りけり、西の方にさせりける枝の、もみぢ初めたりけるを、上にさふらふ男の子どもの詠みけるついでに詠める

藤原勝臣

同じ枝をわきて木の葉のうつろふは西こそ秋の初めなりけれ

石山に詣でける時、音羽山の紅葉を見て詠める

貫之

秋風の吹きにし日より音羽山峰の梢も色づきにけり

是貞の親王の家の歌合に詠める　敏行朝臣

白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉を千々に染むらむ

壬生忠岑

秋の夜の露をば露とおきながら雁の涙や野べを染むらむ

題しらず　讀人しらず

秋の露色こそことなるにおけばこそ山の木の葉の千種なるらめ

守山のほとりにて詠める　貫之

白露も時雨もいたくもる山は下葉殘らず色づきにけり

秋の歌とて詠める　在原元方

雨降れど露も漏らじを笠とりの山はいかでかもみぢそめけむ

神の社のあたりをまかりける時に、瑞垣の

うちの紅葉を見て詠める　貫之

ちはやぶる神の齋垣にはふ葛も秋にはあへずうつろひにけり

是貞のみこの家の歌合に詠める　忠岑

雨ふれば笠とり山のもみぢ葉は行きかふ人の袖さへぞ照る

寛平御時きさいの宮の歌合の歌　讀人しらず

散られどもかれてぞ惜しきもみぢ葉は今はかぎりの色と見つれば

大和の國にまかりける時、佐保山に霧のたてりけるを見て詠める　紀友則

誰が爲の錦なればか秋霧の佐保の山べを立ち隠すらむ

是貞のみこの家の歌合の歌　讀人しらず

秋霧は今朝はな立ちそ佐保山の柞の紅葉よそにても見む

秋の歌とて詠める　坂上是則

さほ山のはゝその色はうすけれど秋は深くもなりにけるかな

人の前栽に菊に結びつけて植ゑける歌　在原業平朝臣

移し植ゑば秋なき時や咲かさらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや

寛平御時、菊の花を詠ませたまふける

ひさかたの雲の上にて見る菊は天つ星とぞあやまたれける　敏行朝臣

〔此歌はまだ殿上許されざりける時に召上げられて仕うまつるとなむ〕

是貞のみこの家の歌合の歌　紀友則

露ながら折りて挿頭さむ菊の花老いせぬ秋の久しかるべく

寛平御時、后の宮の歌合の歌　大江千里

植ゑし時花待遠にありし菊うつろふ秋にあはむとや見し

同じ御時、せられける菊合に、洲濱をつくりて菊の花植ゑたりけるに、加へたりける歌、吹上の濱の形に、菊植ゑたりけるを詠める　菅原朝臣

秋風のふきあげに立てる白菊は花かあらぬか波の寄するか

仙宮に菊を分けて人の至れるかたを詠める　素性法師

濡れて干す山路の菊の露の間にいつか千歳を我れは經にけむ

菊の花のもとにて、人の人待てるかたを詠める　友則

花見つゝ人待つ時は白妙の袖かとのみぞあやまたれける

大澤の池のかたに菊植ゑたりけるを詠める

一本と思ひし菊をおほ澤の池の底にも誰か植ゑけむ

世の中のはかなきことを思ひける折に、菊の花を見て詠める　貫之

秋の菊匂ふ限りはかざしてむ花よりさきと知らぬわが身を

白菊の花を詠める　凡河内躬恒

心あてに折らばや折らむ初霜の置き惑はせる白菊の花

是貞のみこの家の歌合の歌　讀人しらず

色かはる秋の菊をば一歳に再び匂ふ花とこそ見れ

仁和寺に菊の花召しける時に、歌そへて奉れと仰せられければ詠みて奉りける　平貞文

秋をおきて時こそありけれ菊の花うつろふからに色のまされば

人の家なりける菊の花を移し植ゑたりける所を詠める　貫之

咲き初めし宿しかはれば菊の花色さへにこそ移ろひにけれ

題しらず　讀人しらず

佐保山の柞の紅葉散りぬべみ夜さへ見よと照らす月かげ

宮づかへ久しうつかうまつらで、山里に籠

り侍りけるに詠める　　藤原關雄

奥山の巖陰紅葉散りぬべし照る日の光り見る時無くて

題しらず　　讀人しらず

龍田川紅葉亂れて流るめり渡らば錦中や絶えなむ

〔此歌は、ある人奈良帝の御歌なりとなむ申す〕

たつた川もみぢ葉ながる神なびの三室の山に時雨降るらし

又は、あすか川もみぢ葉流る

戀しくば見ても忍ばむもみぢ葉を吹きな散らしそ山おろしの風

秋風にあへず散りぬるもみぢ葉の行くへ定めぬわれぞ悲しき

秋は來ぬ紅葉は宿に降り敷きぬ道踏み分けて訪ふ人はなし

踏み分けて更にや訪はむもみぢ葉のふり隱してし道と見ながら

秋の月山べさやかに照らせるは落つる紅葉の數を見よとか

吹く風の千種の色に見えつるは秋の木の葉の散ればなりけり　　關雄

霜の經露の緯こそ弱からし山の錦の織ればかつ散る

雲林院の木のかげに佇みて詠みける　　僧正遍昭

わび人のわきて立寄る木のもとは頼むかげなく紅葉散りけり

二條の后の東宮の御息所と申しける時に、御屏風に龍田川に紅葉流れたる繪を書けりけるを題にて詠める　　素性

もみぢ葉の流れて止る湊には紅深き波や立つらむ　　業平朝臣

ちはやぶる神代も聞かず龍田川唐紅に水絞染るとは

是貞のみこの家の歌合の歌　敏行朝臣

我が來つる方も知られずくらぶ山木々の木の葉の散りと紛ふに

神なびの三室の山を秋行けば錦裁ち着る心地こそすれ　忠岑

北山に紅葉惜むとてまかりける時に詠める　貫之

見る人も無くて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり

秋の歌　兼覽王

立田姫手向くる神のあればこそ秋の木の葉の幣と散るらめ

小野といふ所に住み侍りける時、紅葉を見て詠める　貫之

秋の山紅葉を幣と手向くれば住む我さへぞ旅ごゝちする

神なびの山を越えて龍田川を渡りける時に、紅葉の流れけるを見て詠める　清原深養父

神なびの山を過ぎ行く秋なれば龍田川にぞ幣は手向くる

寛平御時、后の宮の歌合の歌　藤原興風

白浪に秋の木の葉の浮べるを海士の流せる船かとぞ見る

龍田川のほとりにて詠める　坂上是則

もみぢ葉の流れざりせば立田川水の秋をば誰か知らまし

志賀の山越にて詠める　春道列樹

山河に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり

池の畔にて紅葉の散るを詠める　躬恒

風吹けば落つるもみぢ葉水清み散らぬ影さへ底に見えつゝ

亭子院の御屏風の繪に、川渡らむとする人の

紅葉の散る木の下に馬をひかへて立てるを
詠ませたまひければつかうまつりける
立ちどまり見てを渡らむもみち葉は雨と降るとも水は増らじ
是貞の親王の家の歌合の歌　忠岑

山田守る秋の假庵に置く露は稻負せ鳥の涙なるべし
題しらず　讀人しらず

穗にも出ぬ山田を守ると藤衣稻葉の露に濡れぬ夜はなし
苅れる田に生ふる穗の穗に出ぬは世を今更に飽き果てぬとか
北山に茸狩にまかれける日詠める　素性法師

もみぢ葉は袖に扱入れてもて出なむ秋は限と見む人のため
寛平御時、ふるき歌奉れと仰せられければ、

立田川もみぢ葉流るといふ歌を書きて、その　興風
同じ心を詠めりける
み山より落ち來る水の色見てぞ秋は限と思ひ知りぬる
秋の果つる心を龍田川に思ひやりて詠める　貫之

年毎にもみぢ葉流す龍田川湊や秋のとまりなるらむ
ながの月の晦の日、大井にて詠める
夕月夜をぐらの山に鳴く鹿の聲のうちにや秋は來るらむ
同じつごもりの日詠める　躬恒

道知らば尋ねも行かむもみぢ葉を幣と手向けて秋は去にけり

卷五終

卷六

冬歌

題しらず　讀人しらず

龍田川錦織り懸く神無月時雨の雨を經緯(たてぬき)にして

冬の歌とて詠める　源宗于朝臣

山里は冬ぞ淋しさ増りける人目も草もかれぬと思へば

題しらず　讀人しらず

大空の月の光し寒ければ影見し水ぞ先づ氷りける

夕されば衣手寒しみ吉野の高木のやまにみ雪降るらし

今よりはつぎて降らなむ我が宿の薄(すゝき)おし並み降れる白雪

降る雪はかつぞ消ぬらし足曳の山の瀧つせ音まさるなり

この川にもみぢ葉流る奥山の雪消の水ぞ今まさるらし

故里は吉野の山し近ければ一日もみ雪降らぬ日はなし

我が宿は雪降りしきて道も無し踏(ふ)み分けて訪ふ人し無ければ

冬の歌とて詠める　紀貫之

雪降れば冬籠りせる草も木も春に知られぬ花ぞ咲きける

志賀の山越にて詠める　紀あきみれ

白雪の所もわかず降りしけば巖にも咲く花とこそ見れ

奈良の京にまかれりける時に宿れりける所にて詠める　坂上是則

み吉野の山の白雪積るらし故里寒くなりまさるなり

寛平御時、后の宮の歌合の歌　藤原興風

浦辺く降り來る雪は白波の末の松山越すかとぞ見ゆ

壬生忠岑

み吉野の山の白雪踏分けて入りにし人のおとづれもせぬ
白雪の降りて積もれる山里は住む人さへや思ひ消ゆらむ

雪の降るを見て詠める　凡河内躬恒

雪降りて人も通はぬ道なれや跡はかもなく思ひ消ゆらむ

雪の降りけるを詠みける　清原深養父

冬ふがら空より花の散り來るは雲の彼方(あなた)は春にやあるらむ

雪の木に降りかゝれりけるを詠める　貫之

冬籠り思ひかけぬを木の間より花と見るまで雪ぞ降りける

大和の國にまかれりける時に、雪の降りけるを見て詠める　坂上是則

朝(あさぼらけ)朗有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪

題しらず　讀人しらず

消(け)ぬが上に復も降りしけ春霞立ちなばみ雪稀にこそ見め
梅の花それとも見えず久方の天霧(あまぎ)る雪のなべて降れゝば

〔此歌は、ある人の曰く、柿本人麿が歌なり〕

梅の花に雪の降れるを詠める　小野篁朝臣

花の色は雪に交りて見えずとも香をだに匂へ人の知るべく

雪のうちの梅の花を詠める　紀貫之

梅の香の降り置ける雪に紛ひぜば誰かことゞ分きて折らまし

雪の降りけるを見て詠める　紀友則

雪降れば木毎に花ぞ咲きにける何れを梅と別きて折らまし

物へまかりける人を待ちて、十二月(しはす)のつごもり
に詠める　躬恒

わが待たぬ年は來ぬれど冬草の枯れにし人は音づれもせず

年の果に詠める　在原元方

あら玉の年の終になる毎に雪も我が身も降りまさりつゝ

寛平御時、后の宮の歌合の歌　讀人しらず

雪降りて年の暮れぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ

年の果に詠める　春道列樹

昨日といひ今日と暮らしてあすか川流れて早き月日なりけり

歌奉れと仰せられし時に詠みて奉れる　紀貫之

行く年の惜しくもあるかな十寸鏡見る影さへにくれぬと思へば

卷六終

卷七

賀歌

題しらず　讀人しらず

我が君は千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苔のむすまで

わたつ海の濱の眞砂を數へつゝ君が千年のあり數にせむ

志保の山さしでの磯に鳴く千鳥君が千代をば八千代までぞ鳴く

我が齡君が八千代に取り添へて留め置きては思ひでにせよ

仁和の御時、僧正遍昭に七十の賀給ひける時の御歌

かくしつゝ兎にも角にもながらへて君が八千代に逢ふ由もがな

仁和の帝の親王におはしましける時に御叔

母の八十の賀に、銀を杖に造れりけるを

見てかの御叔母に代りて詠める　僧正遍昭

千早ふる神や伐りけむ衝くからに千歳の坂も越えぬべらなり

堀河の太政大臣の四十の賀、九條の家に

てしける時に詠める　在原業平朝臣

櫻花散り交ひ曇れ老らくの來むといふなる道惑ふがに

貞辰の皇子の叔母の四十の賀を大井にて

しける日詠める　紀これをか

龜の尾の山の岩根をとめて落つる瀧の白玉千世の數かも

貞保の親王の、后の宮の五十の賀奉りげ

る御屏風に、櫻の花の散る下に人の花見た

る繪かけるを詠める　藤原興風

徒に過ぐる月日は思ほえで花見て暮らす春ぞ少き

本康の親王の、七十の賀の、うしろの屏

風に詠みてかきける　紀貫之

春來れば宿に先づ咲く梅の花君が千歳の挿頭とぞ見る

素性法師

古に有りき有らずは知られども千年のためし君に始めむ

臥して思ひ起きて數ふる萬世は神ぞ知らむ我が君のため

蔭原三善が六十の賀に詠みける　在原滋春

鶴龜も千年の後は知らなくに飽かぬ心にまかせ果てゝむ

〔此歌は、ある人、在原のときはるが歌ともいふ〕

良峯の經世が四十の賀に女に代りて詠

み侍りける　素性法師

萬代をまつにぞ君を祝ひつる千年のかげに住まむと思へば

内侍(ないし)のかみの、右大將藤原朝臣の四十賀しける時に、四季の繪かけるうしろの屏風に書きたりける歌

春　躬恒

春日野に若菜摘みつゝ萬代を祝ふ心は神ぞ知らむ

夏　友則

山高み雲井に見ゆる櫻花心のゆきてたらぬ日ぞなき

秋　躬恒

珍しき聲ならなくに時鳥許(こゝら)多の年を飽かずもあるかな

冬　貫之

住の江の松を秋風吹くからに聲打ち添ふる沖つ白浪

千鳥鳴く佐保の河霧立ちぬらし山の木の葉も色まさりゆく　忠岑

秋來れど色も變らぬ常盤山他處(よそ)の紅葉を風ぞかしける　是則

白雪の降りしく時はみ吉野の山下風に花ぞ散りける　貫之

東宮の生れたまへりける時に參りて詠める　典侍(ないしのすけ)藤原因香(よるか)朝臣

峯高き春日の山に出づる日は曇る時なく照すべらなり

卷七終

卷八

離別歌

題しらず　　在原行平朝臣

立別かれいなばの山の嶺に生ふるまつとし聞かば今歸り來む

蝶蘿なく秋の萩原朝たちて旅ゆく人をいつとか待たむ　　讀人しらず

限りあき雲井のよそに別るとも人を心に後らさむやは

小野千古が陸奥介にまかりける時に母の詠める

たらちねの親の守りとあひ添ふる心ばかりは關なさゞめそ

貞辰の親王の家にて、藤原のきよふが近江の介にまかりける時に、馬の餞しける

紀としさだ

夜詠める

今日別れ明日はあふみと思へども夜や更けぬらむ袖の露けき

越へまかりける人に詠みて遣しける

かへる山ありとは聞けど春霞立ち別れなば戀しかるべし

人の馬のはなむけにて詠める　　紀貫之

惜むから戀しきものを白雲の立ちおむ後は何心地せむ

友達の人の國へまかりけるに詠める　在原滋春

別れては程を隔つと思へばやかつ見ながらにかれて戀しき

東の方へまかりける人に詠みて遣はしける　　いかごのあつゆき

思へども身をし分ければ目に見えぬ心を君に比へてぞやる

逢坂にて人を別れける時に詠める

逢坂の關し正しきものならば飽かず別るゝ君を留めよ　なにはのよろづを

題しらず　讀人しらず

唐衣たつ日は聞かじ朝露の置きてし行かば消ぬべきものを

〔此歌は、ある人、司を給はりて新しき女につきて、年經て住みける人を捨てゝ、明日なむ立つとばかり云へりける時に、とも斯も云はで、詠みて遣はしける。〕

常陸へまかりける時に、藤原公利に詠みて遣はしける　寵

朝なけに見べき君とし頼まれば思ひたちぬる草枕なり

紀のむねさだが吾妻へまかりける時に、人の家に宿りて、曉出で立つとてまかり申

しければ、女の詠みて出せりける　讀人しらず

得ぞ知らぬ今試みむ命あらば我や忘るゝ人や訪はぬと

相知りて侍りける人の東の方へまかりけるを送るとて詠める　深養父

雲井にも通ふ心のおくれれば別るゝ人に見ゆばかりなり

友の東へまかりける時に詠める　良峯のひでをか

白雲の此方彼方に立ち別れ心を幣と碎く旅かな

陸奥へまかりける人に詠みて遣はしける　貫之

白雲の八重に重なる遠にても思はむ人に心隔つな

人を別れける時に詠みける

別れてふ事は色にもあらなくに心に染みて侘しかるらむ

相知れりける人の越の國にまかりて、年經て京にまうできて又歸りける時に詠める

凡河内躬恒

歸山何ぞはありて有る甲斐は來ても留らぬ名にこそありけれ

越の國にまかりける人に詠みて遣しける

よそにのみ戀ひや渡らむ白山のゆき見るべくもあらぬ我が身は

音羽山のほとりにて人を別るとて詠める

貫之

音羽山木高く鳴きて時鳥君が別れを惜むべらなり

藤原の後蔭が唐物の使に、長月の晦方にまかりけるに、殿上のをのこども酒賜びけ

るついでに詠める

藤原兼茂

諸共に鳴きてとゞめよ蟋蟀秋の別は惜しくやはあらぬ

平ともの り

秋霧のともにたちいでゝ別れなば晴れぬ思に戀やわたらむ

源の實が筑紫へ湯あみむとて罷りける時に、山崎にて別れ惜みける所にて詠める

しるめ

いのちだに心に叶ふものならば何か別れの悲しからまし

山崎より神なびの森まで、送りに人々まかりて、歸りがてにして別れ惜みけるに詠める

源實

人遣りの道ならなくに大方は往き憂しと云ひていざ歸りなむ

今は是より歸りれと實が云ひける折に詠み
ける　藤原かねもち

慕はれて來にし心の身にしあれば歸るさまには道も知られず

藤原のこれをかが武藏の介にまかりける時
に、送りに逢坂を越ゆとて詠みける　貫之

かつ越えて別れも行くか逢坂は人頼めなる名にこそありけれ

大江の千古が越へまかりける馬のはなむけ
に詠める　藤原兼輔朝臣

君が行く越の白山知られども雪のまに〳〵跡は尋ねむ

人の花山に詣で來て、夕さりつかた、歸り
なむとしける時に詠める　僧正遍昭

夕暮の籬は山と見えなゝむ夜は越えじと宿りとるべく

山に登りて歸りまうできて、人々別れける
ついでに詠める　幽仙法師

別れをば山の櫻に任せてむ留めむ留めじは花のまに〳〵

雲林院の親王の舍利會に、山に登りて歸り
けるに、櫻の花の下にて詠める　僧正遍昭

山風に櫻吹きまき亂れなむ花の紛れに君留るべく

幽仙法師

事ならば君留るべく匂はなむ歸すは花の憂きにやはあらぬ

仁和の帝、親王におはしましける時に、布
留の瀧御覽じにおはしまして、歸り給ひけ
るに詠める　兼藝法師

飽かずして別るゝ涙瀧にそふ水まさるとや下は見ゆらむ

雷の霈にめしたりける日、大御酒など

たうべて、雨のいたう降りければ、夕さり

まで侍りて、まかり出で侍りける折に杯を

とりて　　貫之

秋萩の花をば雨に濡らせども君をばまして惜しとこそ思へ

と詠めりける返歌　　兼覧王

惜むらむ人の心を知らぬ間に秋の時雨と身ぞふりにける

兼覧のおほきみに初めて物語して、別れけ

る時に詠める　　躬恒

別るれど嬉しくもあるか今宵より相見ぬさきに何を戀ひまし

題しらず　　讀人しらず

飽かずして別るゝ袖の白玉は君が記念と裏みてぞ行く

限りなく思ふ涙にそぼちぬる袖は乾かじ逢はむ日までに

搔暮しことはふらなむ春雨に濡衣着せて君を留めむ

強ひて行く人を留めむ櫻花いづれを道と惑ふまで散れ

志賀の山越にて石井のもとにて物いひける

人の別れける折に詠める　　貫之

掬ぶ手の雫に濁る山の井のあかでも人に別れぬるかな

道にあへりける人の車に、物をいひつきて

別れける所にて詠める　　友則

下の帶の道は片々別るとも行き廻りても逢はむとぞ思ふ

巻八終

卷九

羈旅歌

唐土にて月を見て詠みける　安倍仲麿

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

〔此歌は、昔仲麿を唐土に物ならはしに遣はしたりけるに、數多の年を經て、得歸りまうで來ざりけるを、此國より又使まかり至りけるにたぐひて、まうで來なむとて出でたりけるに、めい洲といふ所の海邊にて、かの國の人、馬の餞しけり。夜になりて月のいと面白くさし出でたりけるを見て、詠めるとなむ語り傳ふる。〕

隱岐の國に流されける時に、船に乘りて出で立つとて、京なる人の許に遣しける　小野篁朝臣

海原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよ海人の釣舟

題しらず　讀人しらず

都出でゝ今日みかのはら泉川河風寒し衣かせ山

ほの〴〵と明石の浦の朝霧に島隱れ行く船をしぞおもふ

〔此歌は或人の曰く、柿本人麿が歌なり。〕

あづまの方へ友とする人、一人二人誘ひていきけり。三河國八橋といふ所に至れりけるに、その川のほとりに杜若いと面白く咲けりけるを見て、木の陰に下り居てかきつばたといふ五文字を句の頭に据ゑて、

旅の心を詠まむとて詠める　　在原業平朝臣

から衣きつゝ馴れにしつまし有れば遥々きぬる旅をしぞ思ふ

武藏の國と下総の國との中にある角田川の邊に到りて、都のいと戀しく覺えければ、しばし川のほとりにおりゐて思ひやれば、限なく遠くも來にけるかなと、思ひわびて眺めをるに、渡守、はや舟に乘れ、日も暮れぬと云ひければ、舟に乘りて渡らむとするに、皆人、物わびしくて京に思ふ人無くしもあらず、然る折に白き鳥の、嘴と足と赤き、川のほとりに遊びけり。京には見えぬ鳥なりければ、皆人見知らず、渡守にこれは何鳥ぞと問ひければ、これなむ都鳥といひけるを聞きて詠める

名にし負はゞいざ言問はむ都鳥我が思ふ人は有りや無しやと

讀人しらず

北へゆく雁ぞ鳴くなる連れて來し數は足らでぞ歸るべらなる

〔此歌は、ある人、男女諸共に、人の國へまかりけり。男まかり至りて、即みまかりにければ、女、獨、京へ歸りける道に、歸る雁の鳴けるを聞きて詠めるとなむいふ。〕

あづまの方より京へまうで來とて道にて詠める　　おさ

山隱す春の霞ぞ恨めしき何れ都の境なるらむ

越の國へまかりける時、白山を見て詠める

消え果つる時し無ければ越路なる白山の名は雪にぞありける

あづまへまかりける時、道にて詠める　　貫之

絲に縒る物ならなくに別れぢの心細くも思ほゆるかな

甲斐の國へまかりける時、道にて詠める　　躬恒

夜を寒み置く初霜を拂ひつゝ草の枕にあまたゝび寢ぬ

但馬の國の湯へまかりける時に、二見の浦といふ所にとまりて、夕さりの乾飯たうべけるに、ともにありける人々歌詠みけるついでに詠める　　藤原かれすけ

夕づく夜覺束おきな玉櫛笥二見の浦はあけてこそ見め

惟喬の親王のともに、狩にまかりける時に、天の川といふ所の川の邊におりゐて酒など飲みけるついでに、皇子のいひけらく、狩して天の川原にいたる、といふ心を詠みて盃はさせ。と云ひければ詠める　　業平朝臣

狩りくらし織女に宿惜らむ天の川原に我は來にけり

親王此歌をかへす〳〵詠みつゝ、返し得せずなりにければ、ともに侍りて詠める　　紀有常

一年に一たび來ます君待てば宿貸す人もあらじとぞ思ふ

朱雀院の奈良におはしましける時に手向山

にて詠める　菅原朝臣

此たびは幣もとりあへず手向山紅葉の錦神のまに〳〵

素性法師

手向にはつゝりの袖も切るべきに紅葉に飽ける神や返さむ

巻九終

巻十

物名

うぐひす　藤原敏行朝臣

心から花の果に濡ちつゝうくひすとのみ鳥の鳴くらむ

ほとゝぎす

來べきほとゝきすぎぬれや待佗びて鳴くなる聲の人をとよむる

在原しげはる

うつ蟬

涙のうつせみれば玉ぞ亂れける拾はゞ袖に果敢からむや

壬生忠岑

かへし

たもとより離れて玉を包まめやこれなむそれとうつせみむかし

讀人しらず

うめ

あなうめに常なるべくも見えぬ哉戀しかるべき香は匂ひつゝ

かにはざくら　貫之

かづけども涙のなかにはさくられて風吹く毎に浮き沈む玉

すもゝの花

今いくか春しなければうぐひすもゝのはながめて思ふべらなり

からもゝの花　深養父

あふからもゝのばなほこそ悲しけれ別れむ事をかねて思へば

たちばな　小野しげかげ

足引の山たちばなれ行く雲の宿り定めぬ世にこそありけれ

をかだまの木　友則

み吉野の吉野の瀧に浮び出づるあわをかたまのきゆと見つらむ

やまがきの木　讀人しらず

秋は來ぬ今やまがきのきりぐす夜なゝ鳴かむ風の寒さに

あふひ　かつら

かくばかりあふひの稀になる人をいかがつらしと思はざるべき

人目ゆゑ後にあふひの遙けくばわかつらきにや思ひなされむ

くたに　僧正遍昭

散りぬれば後はあくたになる花を思ひ知らずも惑ふ蝶かな

さうび　貫之

我はけさうひにぞ見つる花の色をあだなる物といふべかりけり

女郎花　友則

白露を玉に貫くとや篠蟹の花にも葉にもいとをみなへし

朝露を分けそぼちつゝ花見むと今ぞ野山をみなへしりぬる

朱雀院の女郎花あはせの時にをみなへしと

いふ五文字を句の頭に置きて詠める　貫之

をくら山みねたちならしなく鹿のへにけむ秋をしる人ぞ無き

きちかうの花　友則

あきちかう野はなりにけり白露の置ける草葉も色變り行く

しをに　讀人しらず

振延（ふりはへ）ていざ故郷の花見むと來（こ）しをにほひぞうつろひにける

りうたむの花　友則

我宿の花蹈みしだくとりうたむのはなければや此處にしも來る

をばな　讀人しらず

ありと見て頼むぞかたき空蟬の世をばなしやゝ思ひなしてむ

けにごし　矢田部名寅（なざね）

うちつけにこしとや花の色を見む置く白露の染むるばかりを

二條后、東宮の御息所と申しける時に、菊（きく）の花に創り花挿せりけるを詠ませ給ひける　文屋康秀

花の木にあらざらめども咲きにけり古（ふる）りにしこのみなる時もがな

しのぶぐさ　紀としさだ

山高みつれにあらしのふくさとは匂ひもあへず花ぞ散りける

やまし　平あつゆき

時鳥峯の雲にやましりにし有りとは聞けど見る由もなし

からはぎ　讀人しらず

うつ蟬のからはぎ毎に留むれどたまの行方（ゆくへ）を見ぬぞ悲しき

かはなぐさ　深養父

ぬば玉の夢に何かはなぐさまむ現（うつ）にだにも飽かぬこゝろを

さがりこけ　高向（たかむこの）としはる

花の色は只ひとさかりこけれども かへすがへすぞ露は染めける

にがたけ　滋春

命とて露を頼むにかたければ 物わびしらに鳴く野邊の虫

かはたけ　景式（かげのりの）王（おほきみ）

小夜更けてなかはたけ行く久方の 月吹きかへせ秋の山風

わらび　眞（しん）せい法師

煙立ちもゆとも見えぬ草の葉を 誰かわらびと名づけ初めけむ

さゝまつ　ぴは　ばせをば　紀のめのと

いさゝめに時まつ間にぞひは經ぬる 心ばせをば人に見えつゝ

なし　なつめ　くるみ　兵衛

あぢきなし歎きなつめぞ憂（うき）事にあひくるみをば捨てぬ物から

からことゝいふ所にて、春の立ちける日詠める　安倍清行朝臣

波の音のけさからことに聞ゆるは 春の調べや改まるらむ

いかゞ崎　兼覽王

楫に當る波の雫を春なれば いかゞさき散る花と見ざらむ

からさき　阿保のつねみ

かの方にいつからさきに渡りけむ 波路は跡も殘らざりけり

涙の花おきからさきて散り來めり 水の春とは風やふるらむ

紙屋川　伊勢

ぬば玉の我が黑かみやかはるらむ 鏡のかげに降れる白雪

よど川　貫之

足曳の山邊に居れば白雪の如何にせよとかはるゝ時なき
かた野　　忠岑

夏草の上は繁れる沼水のゆくかたのなき我が心かな
桂の宮　　源ほどこす

秋來れど月のかつらのみやはなる光を花と散らすばかりを
百和香　　讀人しらず

花毎に飽かず散らしゝ風なればいくそばくわがうしとかは思ふ
すみながし　　滋春

春がすみなかし通ひ路無かりせば秋來る雁は歸らざらまし
おき火　　都良香

流れ出づる方だに見えぬ涙川おきひむ時や底は知られむ
ちまき　　大江千里

のちまきの後れて生ふる苗なれどあだにはならぬ頼みとぞ聞く
「は」を初、「る」をはてにて、「ながめ」を
かけて、時の歌詠めと人のいひければ詠める　　僧正聖寶

はなのなかめに飽くやとて分け行けば心ぞともに散りぬべらなる

卷十終

卷十一

戀歌一

題しらず　讀人しらず

時鳥鳴くや五月のあやめ草あやめも知らぬ戀もするかな

素性法師

音にのみ菊の白露夜は置きて晝は思ひにあへず消ぬべし

紀貫之

吉野川岩浪高く行く水の早くぞ人を思ひそめてし

藤原勝臣

白波の跡無きかたに行く船も風ぞたよりのしるべなりける

在原元方

音羽山音に聞きつゝ逢坂の關の此方に年を經るかな

立ち歸りあはれとぞ思ふよそにても人に心をおきつ白浪

貫之

世の中はかくこそありけれ吹く風の目に見ぬ人も戀しかりけり

右近の馬場の引折の日、むかひにたてたりける車の下簾より、女の顔の仄に見えければ詠みて遣はしける

在原業平朝臣

見ずもあらず見もぜぬ人の戀しくはあやなく今日や眺め暮さむ

讀人しらず

知る知らぬ何かあやなく分きていはむ思のみこそしるべなりけれ

春日の祭にまかれりける時に、物見に出でたりける女の許に家を尋ねて遣はせりける

壬生忠岑

春日野の雪間を分けて生ひ出くる草のはつかに見えし君はも

人の花づみしける所にまかりて、其處なりける人の許に後に詠みて遣はしける　貫之

山櫻霞の間よりほのかにも見てし人こそ戀ひしかりけれ

題しらず　元方

便にもあらぬ思ひの怪しきは心を人につくるなりけり

凡河内躬恒

初雁のはつかに聲を聞きしより中空にのみ物を思ふかな

貫之

逢ふ事は雲井遙になる神の音に聞きつゝ戀ひやわたるらむ

讀人しらず

片糸を此方彼方に縒りかけて逢はずば何を玉の緒にせむ

夕暮は雲の旗手に物ぞ思ふ天つ空なる人を戀ふとて

刈菰の思ひ亂れて我が戀ふと妹知らめや人し告げずば

つれもなき人をやれたく白露のおくとは歎き寢とは偲ばむ

千早ぶる神の社の木綿襷一日も君をかけぬ日はなし

我が戀は虛しき空に滿ちぬらし思ひやれども行く方もなし

駿河なる田子の浦涙立たぬ日はあれども君を戀ひぬ日はなし

夕づく日さすや岡べの松の葉のいつともわかぬ戀もするかな

足引の山下水の木隱れてたぎつ心を堰きぞかねつる

吉野川岩きりとほし行く水の音には立てじ戀は死ぬとも

瀧つ瀨の中にも淀は有りてふを何ど我が戀の淵瀨ともなき

山高み下行く水の下にのみ流れて戀ひむ戀ひは死ぬとも

思ひ出ろ常磐の山の岩躑躅云はればこそあれ戀しきものを
人知れず思へば苦し紅の末摘花の色に出でなむ
秋の野の尾花に交り咲く花の色にや戀ひむ逢ふよしをなみ
我が園の梅の上枝に鶯の音に鳴きぬべき戀もするかな
足引の山時鳥我が如や君に戀ひつゝ寢ねがてにする
夏なれば宿に燻ぶる蚊遣火のいつまで我が身下もえにせむ
戀せじと御手洗川にせし禊神は受けずもなりにけらしも
哀れてふ事だにふくば何をかは戀の亂れの束緒にせむ
思ふには忍ぶることぞまけにける色には出じと思ひしものを
我が戀は人知るらめや敷妙の枕のみこそ知らば知るらめ
淺茅生の小野の篠原忍ぶとも妹知るらめや言ふ人なしに
人知れぬ思ひやなにぞ蘆垣の間近けれども逢ふよしのなき

思ふとも戀ふとも逢はむものなれや結ふ手もたゆく解くる下紐
いでわれを人な咎めそおほ舟のゆたの搖蕩に物思ふ頃ぞ
伊勢の海に釣する海人の泛子なれや心一つを定めかねつる
伊勢の海の蜑の釣縄打はへて苦しとのみや思ひわたらむ
涙川なに水上を尋ねけむ物思ふ時のわが身ふりけり
種しあれば岩にも松は生ひにけり戀をし戀ひば逢はざらめやは
朝な〳〵立つ川霧の空にのみ浮きて思のある世なりけり
忘らるゝ時しなければ蘆鶴の思ひ亂れて音をのみぞ鳴く
唐衣日も夕暮になる時は返す〳〵ぞ人は戀ひしき
宵々に枕定めむ方もなし如何に寢し夜か夢に見えけむ
戀しきに命を代ふる物ならば死には安くぞあるべかりける
人の身も習はし物を逢はずしていざ試みむ戀や死ぬると

忍ぶれば苦しき物を人知れず思ふてふこと誰に語らむ

來む世にも早なりなゝむ目の前につれなき人を昔と思はむ

つれもなき人を戀ふとて山彦の應するまで歎きつるかな

行く水に數書くよりも果敢きは思はぬ人を思ふなりけり

人を思ふ心は我にあられぬや身の惑ふだに知られざるらむ

思ひやる界遥かになりやする惑ふ夢路に逢ふ人のなき

夢のうちに逢ひ見む事を頼みつゝ暮せる宵は寢む方もなし

戀死れとする業ならしぬば玉の夜はすがらに夢に見えつゝ

涙川枕流るゝうきれには夢もさだかに見えずぞありける

戀すればわが身は影となりにけりさりとて人に添はぬ物ゆゑ

篝火にあらぬわが身のなぞもかく泪の川に浮きて燃ゆらむ

篝火の影となる身のわびしきは流れて下に燃ゆるなりけり

早き瀬に海松生ひせばわが袖の涙の川に植ゑましものを

沖べにも寄らぬ玉藻の涙の上に亂れてのみや戀ひ渡りなむ

蘆鳴の騒ぐ入江の白波の知らずや君は我が戀ふらくを

人知れぬ思ひを常に駿河なる富士の山こそわが身なりけれ

飛ぶ鳥の聲も聞えぬ奥山の深き心を人は知らなむ

逢坂のゆふつけ鳥も我が如く人や戀ひしき音のみ鳴くらむ

逢坂の關に流るゝ岩清水いはで心に思ひこそすれ

浮草の上は繁れる淵なれや深き心を知る人の無き

打わびて呼ばゝむ聲に山彦の應ぬ山はあらじとぞ思ふ

心換へするものにもが片戀は苦しきものと人に知れせむ

よそにして戀ふれば苦し入紐の同じ心にいざ結びてむ

春立てば消ゆる氷の残りなく君が心は我に解けなむ

明けたてば蟬の折延鳴き來らし夜は螢の燃えこそわたれ
夏虫の身を徒になす事も一つ思ひによりてなりけり
夕されば いとゞ干難き我が袖に秋の露さへ置き添りつゝ
何日とても戀しからずはあられども秋の夕は怪しかりけり
秋の田のほにこそ人を戀ひざらめ何どか心に忘れしもせむ
秋の田の穂の上を照す稻妻の光の間にも我や忘るゝ
人目漏る我かはあやな花薄などか穂に出て戀ひずしもあらむ
泡雪の溜ればがてに碎けつゝ我が物思ひの繁き比かな
奥山の菅の根凌ぎ降る雪の消ぬとか云はむ戀の繁きに

卷十一 終

卷十二

戀歌二

小野小町

題しらず

思ひつゝ寢ればや人の見えつらむ夢と知りせば覺めざらましを
假臥に戀しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき
いと切めて戀しき時はぬば玉の夜の衣をかへしてぞ著る

素性法師

秋風の身に寒ければつれもなき人をぞ頼む暮るゝ夜毎に
しもつ出雲寺に人の法事しける日、眞せい
法師の導師にて、いへりける言葉み歌に詠
みて小野小町が許に遣はしける

安倍清行朝臣

裏めども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬ目の涙なりけり

かへし　　小町

愚かなる涙ぞ袖に玉はなす我は堰きあへず瀧つ瀬なれば

寛平御時、きさい宮の歌合の歌　藤原敏行朝臣

戀ひ侘びて打ち寢る中に行き通ふ夢の直道は現ならなむ

住の江の岸に寄る涙夜さへや夢の通路一人目避くらむ　小野美材

我が戀は深山隱れの草なれや繁げさ増れど知る人の無き　紀友則

宵の間も果敢く見ゆる夏虫に惑ひ増れる戀もするかな

夕されば螢より殊に燃ゆれども光見ればや人のつれなき

笹の葉に置く霜よりも獨寢る我が衣手ぞ冴え増りける

我が宿の菊の垣根に置く霜の消えかへりてぞ戀ひしかりける

川の瀨に靡く玉藻のみがくれて人に知られぬ戀もするかな　壬生忠岑

搔き暮し降る白雪の下消に消えて物思ふ頃にもあるかな　藤原興風

君戀ふる涙の床に滿ちぬれば澪標とぞ我はなりける

死ぬる命生きもやすると試みに玉の緒ばかり逢はむと云はなむ

侘びぬれば强ひて忘れむと思へども夢といふ物ぞ人頼めなる　讀人しらず

理なくも寢ても覺めても戀しきか心をいづち遣らば忘れむ

戀ひしきに侘びて魂惑ひなば虛しきからの名にやたちなむ　紀貫之

君戀ふる涙し無くば唐衣胸のあたりは色燃えなまし

題しらず

夜と共に流れてぞ降るなみだ川冬も氷らぬ水泡なりけり

夢路にも露ぞ置くらし夜もすがら通へる袖の沾ちて乾かぬ

素性法師

果敢くて夢にも人を見つる夜は朝の床ぞ起き憂かりける

藤原忠房

偽りの涙なりせば唐衣しのびに袖は絞らざらまし

大江千里

音に泣きて沾ちにしかども春雨に濡れにし袖と問はゞ答へむ

敏行朝臣

我が如く物や悲しき郭公時ぞともなく夜たゞ鳴くらむ

貫之

さつきやま梢か高み時鳥鳴く音空なる繼もするかな

凡河内躬恒

秋霧の晴るゝ時なき心には起居の空も思ほえなくに

清原深養父

蟲の如聲に立てゝは泣かれども涙のみこそ下に流るれ

是貞の親王の家の歌合の歌

讀人しらず

秋なれば山とよむまで鳴く鹿に我劣らめや一人寢る夜は

題しらず

貫之

秋の野に色れて咲ける花の色千種に物を思ふ頃かな

躬恒

一人して物を思へば秋の田の稻葉のそよと言ふ人の無き

人を思ふ心は雁にあられども雲井にのみも鳴き渡るかな　深養父

秋風に搔鳴す琴の聲にさへ果敢く人の戀ひしかるらむ　忠岑

眞菰刈る淀の澤水あめふれば常より殊に增る我が戀　貫之

大和に侍りける人に遣しける

越えぬ間は吉野の山の櫻花人傳にのみ聞きやわたらむ

彌生ばかりに物のたうびける人の許に、又

人まかりて消息すと聞きて詠みて遣しける

露ならぬ心を花におき染めて風吹くごとに物思ひぞつく　坂上是則

我が戀にくらぶの山の櫻花間なく散るとも數はまさらじ　宗岳大頼

冬川の上は氷れる我なれや下に流れて戀ひわたるらむ　忠岑

瀧つ瀨に根ざし止めぬ浮草のうきたる戀も我はする哉　友則

宵々に脫ぎて我が寢るから衣かけて思はぬ時の間も無し

東路の佐夜の中山あか〳〵に何しか人を思ひ初めけむ

敷妙の枕の下に海はあれど人を海松布は生ひずぞありける

年を經て消えぬ思ひはありながら夜の袂は猶氷りつゝ　貫之

我が戀は知らぬ山路にあられども惑ふ心ぞ侘しかりける

紅のふりいでつゝ泣く涙には秋のみこそ色増りけれ
白玉と見えし涙も年經れば唐紅にうつろひにけり　躬恒

夏虫を何か言ひけむ心からわれも思ひに燃えぬべらなり
風吹けば峯に分るゝ白雲の絶えてつれなき人の心か　忠岑

月影に我が身を代ふるものならばつれなき人も哀れとや見む
戀ひ死なば誰が名は立たじ世の中は常無き物と言ひはなすとも　深養父

津の國の難波の蘆の目も遥に茂き我が戀人知らめや
雲も觸れで月日經にける白眞弓起伏し夜は寢こそ寢られぬ　貫之

人知れぬ思のみこそ侘しけれおが歎きをば我のみぞ聞く　友則

言に出て云はぬばかりぞ水無瀬川下に通ひて戀しさものを　躬恒

君をのみ思ひ寐に寢し夢なればわが心から見つるなりけり　忠岑

命にも優りて惜しくあるものは見果てぬ夢の覺むるなりけり　春道列樹

梓弓引けば本末我が方に夜こそまされ戀の心は　躬恒

我が戀は行方も知らず果もなし逢ふを限と思ふ計りぞ

我れのみぞ悲しかりける彦星も逢はで過せる年し無ければ

今ははや戀死なましを逢ひ見むと頼めし事ぞ命なりける　深養父

頼めつゝ逢はで年經る偽りに懲りぬ心を人は知らなむ　朝恒

命やは何ぞは露のあだものを逢ふにし代へば惜しからなくに　友則

卷十二終

卷十三

戀歌三

彌生の朔より忍びに人に物をいひて後に、雨のそぼ降りけるに詠みて遣しける　在原業平朝臣

起きもせず寐もせで夜を明しては春の物とて眺め暮しつ

業平朝臣の家に侍りける女の許に詠みて遣はしける　敏行朝臣

徒然の眺めにまさる涙川袖のみ沾ちて逢ふよしも無し

彼の女に代りて返しに詠める　業平朝臣

淺みこそ袖は沾づらめ涙川身さへ流るゝと聞かば頼まむ

題しらず　讀人しらず

寄方無み身をこそ遠く隔てつれ心は君が影となりにき

徒に行きては來ぬるものゆゑに見まく欲しさに誘はれつゝ

逢はぬ夜の降る白雪と積りなば我さへ共に消ぬべき物を

〔此歌は或人の曰く、柿本人麿が歌なり〕

業平朝臣

秋の野に笹分けし朝の袖よりも逢はで寢る夜ぞ沾ぢまさりける

小野小町

見る目なき我が身を浦と知られねばや離れなで海の足たゆく來る

源宗于朝臣

逢はずして今宵明けなば春の日の長くや人を辛しと思はむ

壬生忠岑

有明のつれなく見えし別れより曉ばかり憂きものはなし

逢ふ事の渚にし寄る涙なれば恨みてのみぞ立ち歸りける

在原元方

かれてより風に先だつ涙なれや逢ふ事なきに夙立つらむ

讀人しらず

陸奥に在りといふなる名取川無き名取りては苦しかりけり

忠岑

あやなくて夙無き名の立田川渡らで止まむものならなくに

御春有助

人はいさ我は無き名の惜しければ昔も今も知らずとぞ言はむ

元方

懲りずまに又も無き名は立ちぬべし人憎からぬ世にし住へば

讀人しらず

東の五條わたりに人を知りおきてまかり通ひけり。忍びなる所なりければ、門より
しも、得入らで垣の頽れより通ひけるを、
度重なりければ、主人聞きつけて、かの
道に夜毎に人をふせて守らすれば、いきけ
れど得逢はでのみ歸りて詠みてやりける

業平朝臣

人知れぬ我が通路の關守は宵々毎にうちも寢なゝむ

題しらず　貫之

忍ぶれど戀しき時は足引の山より月の出でゝこそ來れ

戀ひ〳〵て稀に今宵ぞ逢坂の木綿着鳥は鳴かずもあらなむ

讀人しらず

秋の夜も名のみなりけり逢ふといへばことぞともなく明けぬる物を

小野小町

長しとも思ひぞ果てぬ昔より逢ふ人からの秋の夜なれば

凡河内躬恒

東雲のほがら〳〵と明けゆけば己が衣々きるぞ悲しき

讀人しらず

明けぬとて今はの心つくからになど言ひ知らぬ思ひそふらむ

藤原國經朝臣

寛平御時、きさいの宮の歌合の歌

敏行朝臣

明けぬとて歸る道には扱垂れて雨も涙も降りそぼちつゝ

題しらず

寵

東雲の別れを惜み我ぞ先づ鳥より先になき始めつる

時鳥夢か現か朝露の置きて別れしあかつきの聲　讀人しらず
玉櫛笥明けば君が名立ちぬべみ夜深く來しを人見けむかも

大江千里

今朝はしも起きけむ方も知らざりつ思ひ出づるぞ消えて悲しき
人に逢ひて朝に詠みて遣はしける　業平朝臣
寢ぬる夜の夢を果敢み微睡めばいや果敢くもなり增る哉

業平朝臣の伊勢國にまかりたりける時、齋宮なりける人に、いと密に逢ひて、又の朝に人遣るすべなくて思ひ居りける間に、女の許よりおこせたりける　讀人しらず
君や來し我や行きけむ思ほえず夢か現か寢てか覺めてか

かへし　業平朝臣

掻き暮す心の闇に惑ひにき夢現とは世人定めよ

題しらず　讀人しらず

ぬば玉の闇の現は定かなる夢にいくらもまさらざりけり
小夜更けて天の門渡る月影に飽かずも君を逢ひ見つるかな
君が名も我名も立てじ難波なる見つとも言ふな逢ひきとも言はじ
名取川瀬々の埋木顯れば如何にせむとか逢ひ見初めけむ
吉野川水の心は早くとも瀧の音には立てじとぞ思ふ
戀ひしくば下にを思へ紫の根摺の衣色に出づなゆめ

小野春風

花薄穗に出で〻戀ひば名を惜み下結ふ紐の結ぼほれつ〻
橘のきよきが忍びに相知れりける女の許よ
り、おこせたりける　讀人しらず

思ふどち一人々々が戀しなば誰によそへて藤衣着む
かへし　橘清樹

泣き戀ふる涙に袖の濡ちなば脱ぎ代へがてら夜こそは着め
題しらず　小町

現にはさもこそあらめ夢にさへ人目を守ると見るが侘しき
限りなき思ひの儘に夜も來む夢路をさへに人は咎めじ
夢路には足も休めず通へども現に一目見しことは非ず
讀人しらず

思へども人目づゝみの高ければ川と見ながら得こそ渡られ
瀧つ瀬の早き心を何しかも人目づゝみの堰き止むらむ
寛平御時、后の宮の歌合の歌　紀友則

紅の色には出でじ隱沼の下に通ひて戀ひはしぬとも

題しらず　躬恒

冬の池に棲む鳰鳥のつれもなく底に通ふと人に知らすな
笹の葉に置く初霜の夜を寒み染みはつくとも色に出でめや
讀人しらず

山科の音羽の山の音にだに人の知るべく我が戀ひめかも
〔此歌は或人、あふみのうねめのとなむ申す。〕　清原深養父

滿つ汐の流れ晝間を逢ひ難み海松布の浦に夜をこそ待て
平貞文

白川の知らずとも言はじ底清み流れて代々にすまむと思へば
友則

下にのみ戀ふれば苦し玉の緒の絶えて亂れむ人な咎めそ

我が戀を忍びかねては足引の山橋の色に出でぬべし　讀人しらず

大方は我が名も湊漕出なむ夜を海邊だに海松布少なし　平貞文

枕よりまた知る人もなき戀を涙せきあへず漏しつるかな　讀人しらず

風吹けば涙打つ岸の松ふれや音に顯はれて泣きぬべらなり

〔此歌は、ある人の曰く、柿本人麿がなり。〕

池に棲む名を鴛鴦の水を淺み隱るとすれど顯はれにけり

逢ふことは玉の緒ばかり名の立つは吉野の川の瀧つ瀨の如

群鳥のたちにし我が名今更に事無しぶとも驗あらめや

君により我が名は花に春霞野にも山にも立ち靡きにけり

知るといへば枕だにせで寢し物を歎ならぬ名の空に立つらむ　伊勢

卷十三終

卷十四

戀歌四

題しらず　　讀人しらず

陸奥(みちのく)のあさかの沼の花がつみかつ見る人に戀やわたらむ

あひ見ずは戀しき事もなからまし音にぞ人を聞くべかりける　貫之

石上布留(いそのかみ)のなが道なが〳〵に見ずは戀しと思はましやは　藤原忠行

君といへば見まれ見ずまれ富士の根の珍らしげなく燃ゆる我が戀　伊勢

夢にだに見ゆとは見えじ朝な〳〵我が面影に耻づる身ればこそ　貫之

石間(いはま)行く水の白浪立ちかへりかくこそは見めあかずもあるかな　讀人しらず

伊勢の蜑の朝な夕なにかづくてふみるめに人をあくよしもがな　友則

春霞たなびく山のさくら花見れどもあかぬ君にもあるかな　深養父

心をぞ理(わり)なき物と思ひぬる見るものからや戀しかるべき　凡河内躬恒

枯れ果てむ後をば知らで夏草の深くも人の思ほゆるかな　讀人しらず

飛鳥川淵は瀬になる世なりとも思ひそめてむ人は忘れじ

寛平御時・后の宮の歌合の歌

思ふてふ言の葉のみや秋を經て色も變らぬ物にはあるらむ

題しらず

さ莚に衣片しき今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫

〔又は、宇治の玉姫。〕

君や來む我や行かむの猶豫に槇の板戸もさゝず寢にけり　素性法師

今來むといひしばかりに長月の有明の月を待ち出づるかな

讀人しらず

月夜よし夜よしと人に告げ遣らば來てふに似たり待たずしもあらず

君來ずは寢屋へも入らじ濡紫わが元結に霜は置くとも

宮城野のもとあらの小萩露を重み風を待つごと君をこそ待て

あな戀ひし今も見てしが山賤の垣ほに咲ける大和撫子

津の國の難波思はず山城のとはにあひ見むことをのみこそ

敷島の大和にはあらぬ唐衣頃も經ずして逢ふよしもがな

深養父

戀ひしとは誰が名づけゝむ事ならむ死ぬとぞ唯にいふべかりける

讀人しらず

み吉野の大川のべの藤浪のなみに思はゞ我が戀ひめやは

かく戀ひむものとはわれも思ひにき心の占ぞまさしかりける

天の原蹈み轟かし鳴る神も思ふ中をばさくるものかは

梓弓日置野の葛末つひに我が思ふ人に事のしげけむ

〔此歌は、或人、あめのみかどの、近江の采女に給ひけるとなむ申す。〕

夏引の手びきの糸を繰りかへし事繁くとも絶えむと思ふな

〔此歌は、かへしによみて奉りけるとなむ。〕

里人の事は夏野の茂くとも離れ行く君に逢はざらめやは

藤原敏行朝臣の業平朝臣の家なりける女をあひ知りて、文遣はせりける言葉に、今まうでく、雨の降りけるをなむみわづらひ侍ると、いへりけるを聞て、かの女に代りて詠めりける　在原業平朝臣

數々に思ひ思はず問ひ難み身をしる雨は降りぞまされる

ある女の業平朝臣を、さころ定めずありきすと思ひて詠みてつかはしける　讀人しらず

大幣の引く手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ

かへし　業平朝臣

大幣と名にこそ立てれ流れても終によるる瀬はありてふ物を

題しらず　讀人しらず

須磨の蜑の鹽焼く煙風をいたみ思はぬかたに棚引きにけり

玉かづらはふ木のあまた見えぬれば絶えぬ言の葉嬉しげもなし

誰が里に夜避をしてか時鳥たゞこゝにしも寢たる聲する

いで人は言のみぞよき月草のうつし心は色ことにして

僞のなき世なりせばいかばかり人の言の葉嬉しからまし

僞と思ふものから今更に誰がまことをか我は頼まむ　素性法師

秋風に山の木の葉の變へば人の心もいかゞ　ぞ思ふ

寛平御時、后の宮の歌合の歌　友則

蟬の聲聞けば悲しな夏衣薄くつ人のならむと思へば

題しらず　讀人しらず

空蟬の世の人ごとの茂ければ忘れぬものゝかれぬべらなり

厭かでこそ思はむ中は離れなめそをだに後の忘れがたみに

忘れなむと思ふ心のつくからにありしよりけにまづぞ悲しき

忘れなむ我を恨むな時鳥人のあきには逢はむともせず

絶えず行く飛鳥の川の淀みなば心あるとや人の思はむ

〔此歌は、或人の曰く、中臣の東人が歌なり。〕

淀川のよどむと人は見るらめど流れて深き心あるものを

素性法師

底ひなき淵やはさわぐ山川の淺き瀬にこそうは波は立て

讀人しらず

紅の初花染の色深く思ひし心われ忘れめや

河原左大臣

陸奥の信夫もぢ摺誰ゆゑに亂れむと思ふ我ならなくに

讀人しらず

思ふよりいかにせよとか秋風になびく淺茅の色ことになる

ちゞの色に移ろふらめどしらなくに心し秋の紅葉ならねば

小野小町

海人の住む里のしるべにあらなくに恨みむとのみ人のいふらむ

下野雄宗

曇日の影としなれる我なれば目にこそ見えれ身をば離れず

貫之

色もなき心を人に染めしよりうつろはむとは思ほえなくに

讀人しらず

めづらしき人を見むとやしかもせぬ我が下紐の解けわたるらむ

陽炎のそれかあらぬか春雨のふるひと見れば袖ぞひぢぬる
堀江こぐ棚なし小船こぎかへり同じ人にや戀ひわたりなむ

伊勢

わたつ海とあれにし床を今更に拂はゞ袖やあわと消えなむ

貫之

古になほ立ちかへる心かな戀しきことにものわすれして
人を、しのびにあひしりて逢ひがたくありければ、
其家のあたりをまかりありきけるをりに、雁の鳴くを聞きて詠みてつかはしける

大伴黒主

思ひ出で、戀しき時は初雁のなきてわたると人知らぬや
右のおほいまうち君、住まずなりにければ、かの昔おこせたりける文どもを取りあつめて返すとて、

詠みて送りける

頼め來し言の葉今はかへしてむ我が身ふるればおき所なし

典侍藤原因香朝臣

今はとて返す言の葉ひろひ置きて己がものから形見とやみむ

近院右のおほいまうち君

題しらず

玉鋒の道は常にもまどはなむ人を問ふとも我かと思はむ

よるかの朝臣

讀人しらず

待てといはゞ寢てもゆかなむ強ひてゆく駒の足折れ前の棚橋

中納言源の昇の朝臣の近江の介に侍りける時に、詠みてやれりける

閑院

逢坂の夕告鳥にあらばこそ君がゆきゝを鳴くゝも見め

伊勢

古里にあらぬものから我がために人の心の荒れて見ゆらむ

山賤の垣穂に生へる青つゞら人は來れども言づてもなし　寵

大空は戀しき人の形見かは物思ふごとにあがめらるらむ　さかゐのひとざれ

逢ふまでの形見もわれは何せむに見ても心の慰さまなくに　讀人しらず

親の守りける人のむすめにいと忍びにあひて、物らいひけるあひだに親の呼ぶといひければ、急ぎかへるとて、裳をなむぬぎ置きて入りにける。其後裳を返すとて詠める　興風

逢ふまでの形見とてこそとゞめけめ涙に浮ぶ藻屑なりけり　題しらず　讀人しらず

形見こそ今はあたなれこれなくば忘るゝ時もあらましものを

卷十四　終

卷十五

戀歌五

五條のきさいの宮の西の對に住みける人に、本意にはあらで、物いひ渡りけるを睦月の十日あまりになむ外へ隱れにける。あり所は聞きけれど、え物もいはで、又の年の春、梅の花盛りに月の面白かりける夜、去年を戀ひてかの西の對にいきて、月の傾くまで、あばらなる板敷にふせりて詠める

在原業平朝臣

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身ひとつはもとの身にして

題しらず

藤原仲平朝臣

花薄われこそ下に思ひしか穗に出でて人に結ばれにけり

藤原兼輔朝臣

よそにのみ聞かまし物を音羽川渡るとなしに見馴れ初めけむ

凡河内躬恒

我が如く我を思ひむ人もがなさてもや憂きと世をこゝろみむ

元方

久方の天つ空にも住まなくに人はよそにぞ思ふべらなる

讀人しらず

見ても又またも見まくの欲しければ馴るゝを人は厭ふべらなり

紀友則

雲もなくなぎたる朝の我なれや厭はれてのみ世をば經ぬらむ

讀人しらず

花筐めならぶ人のあまたあれば忘られにけむ數ならぬ身は

うきめのみ生ひて流るゝ浦なれば假にのみこそ蜑はよるらめ

伊勢

あひにあひて物思ふ頃の我が袖に宿る月さへ濡るゝ顔なる

讀人しらず

秋ならでおく白露は目覺する我が手枕の雫なりけり

須磨の蜑の鹽燒衣筬をあらみ間遠にあれや君が來まさぬ

山城の淀のわかごもかりにだに來ぬ人頼む我ぞはかなき

逢ひ見れば戀こそまされ水無瀬川何に深めて思ひ初めけむ

曉の鳴の羽掻きもゝ羽がき君が來ぬ夜は我ぞ數かく

玉かづら今は絶ゆとや吹く風の音にも人の聞えざるらむ

わが袖にまだき時雨の降りぬるは君が心に秋や來ぬらむ

山の井の淺き心も思はぬに影ばかりのみ人の見ゆらむ

忘草種とらましを逢ふ事のいとかく難き物と知りせば

戀ふれども逢ふ夜のなきは忘草夢路にさへや生ひ茂るらむ

夢にだに逢ふこと難くありゆくは我や寢をれぬ人や忘るゝ

兼藝法師

もろこしも夢に見しかば近かりき思はぬ中ぞ遙けかりける

貞登

獨のみ詠め古屋の端なれば人を忍ぶの草ぞ生ひける

僧正遍昭

我宿は道もなきまで荒れにけりつれなき人を待つとせしまに

今來むといひて別れし朝より思ひ暮しの音をのみぞなく

讀人しらず

來めやとは思ふものから蜩の鳴く夕暮はたち待たれつゝ

今しはと佗びにし物を蜘蛛の衣にかゝり我を頼むる

今は來じと思ふ物から忘れつゝ待たるゝ事のまだもやまぬか

月夜には來ぬ人待たるかき曇り雨も降らなむ侘びつゝも寢む

植ゑて去にし秋田刈るまで見え來れば今朝初雁の音にぞ鳴きぬる

來ぬ人を待つ夕暮の秋風はいかに吹けばか侘びしかるらむ

久しくもなりにけるかな住の江のまつは苦しき物にぞありける

兼覽王

住の江のまつほど久に成りぬれば蘆田鶴の音に鳴かぬ日はなし

仲平の朝臣、あひしりて侍りけるを、かれがたに成りにければ、父が大和の守に侍りけるもとへまかるとて、詠みて遣はしける

伊勢

三輪の山いかに待ち見む年經とも尋ぬる人もあらじと思へば

雲林院のみこ

吹き迷ふ野風を寒み秋萩のうつりもゆくか人の心の

小野小町

今はとて我が身時雨にふりぬれば言の葉さへにうつろひにけり

小野貞樹

人を思ふ心木の葉にあらばこそ風のまにまに散りも亂れめ

業平の朝臣、紀の有常がむすめにすみけるを、恨むることありて、しばしのあひだ、晝は來て、夕さりは歸りのみしければ、詠みて遣はしける

天雲のよそにも人のなりゆくかさすがに目には見ゆるものから

業平朝臣

かへし

行きかへり空にのみして經ることは我がゐる山の風早みかも

ひげのりの王

題しらず

唐衣なれば身にこそ纏はれめかけてのみやは戀ひむと思ひし

友則

秋風は身を分きてしも吹かなくに人の心の空に散るらむ

源宗于朝臣

つれもなくなりゆく人の言の葉ぞ秋より先の紅葉なりける

心地そこなへりける頃、あひしりて侍りける人の、問はで心地おこたりて後、とぶらへりければ、詠みて遣はしける

兵衛

死出の山麓を見てぞ歸りにしつらき人よりまづ越えじとて

逢知れりける人の漸く離方に成ける間に燒けたる茅の葉に文をさして遣はせりける

小町が姉

時過ぎて枯ゆく小野の淺茅には今は思ひぞ絶えず燃えける

物思ひける頃、物へまかりける道に野火の燃えけるを見て詠める

伊勢

冬枯の野べと我が身を思ひせば燃えても春を待たまし物を

題しらず

友則

水の沫の消えて憂き身と知りながら流れて猶も頼まるゝかな

讀人しらず

水無瀬川ありて行く水無くばこそ終に我が身を絶えぬと思は

躬恒

吉野川よしや人こそつらからめ早くいひてしことは忘れじ

讀人しらず

世の中の人の心は花染のうつろひやすき色にぞありける

心こそうたて惡(にく)けれ染めざらばうつろふ事も惜しからまじや

色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける　小町

我のみや世をうぐひすとなきわびむ人の心の花と散りなば　讀人しらず

思ふともかれなむ人をいかゞせむ厭かず散りぬる花とこそ見め　素性法師

今はとて君がかれなば我宿の花をば獨見てや忍ばむ　讀人しらず

わすれ草枯れもやすると つれもなき人の心に霜は置かなむ　宗于朝臣

寛平御時、御屏風に歌書かせ給ひける時、詠みて書きける　素性法師

忘草何をか種と思ひしはつれなき人の心なりけり　紀貫之

題しらず

秋の田のいねてふ事もかけおくに何を憂しとか人のかるらむ　讀人しらず

初雁の鳴きこそわたれ世の中の人の心の秋し憂ければ　讀人しらず

哀れとも憂しとも物を思ふ時などか涙のいと流るらむ　典侍藤原直子朝臣

身を憂しと思ふに消えぬ物なれば斯ても經ぬる世にこそありけれ

蜑の刈る藻に住む虫のわれからと音をこそなかめ世をば恨みじ　因幡

あひ見ねも憂きも我が身の唐衣思ひしらずも解くる紐かな

寛平御時、后宮の歌合の歌　　菅野直臣

つれなきを今は戀ひじと思ひへども心弱くも落つる涙か

題しらず　　伊勢

人知れず絶えなましかば侘びつゝも無き名そとだに言はまし物を

讀人しらず

それをだに思ふ事とて我が宿を見きとないひそ人の聞かくに

逢ふことの專絶えぬる時にこそ人の戀しき事も知りけれ

侘びはつる時さへ物の悲しきは何處を忍ぶ涙なるらむ

藤原興風

恨みても泣きてもいはむ方ぞなき鏡に見ゆる影ならずして

讀人しらず

夕されば人なき床をうち拂ひ歎かむためとなれる我身か

わたつみの我身越す浪立ちかへり海人の住むてふうらみつるかな

新田をあら鋤き返し〳〵ても見てこそやまめ人のこゝろを

有磯海の濱の眞砂と頼めしは忘るゝことの數にぞありける

蘆邊より雲井をさして行く雁のいや遠ざかる我が身悲しも

時雨つゝ紅葉ろよりも言の葉の心の秋に逢ふぞ侘しき

秋風の吹きと吹きぬる武藏野はなべて草葉の色かはりけり

小町

秋風に逢ふ頼みこそ悲しけれ我が身空しくなりぬと思へば

平貞文

秋風の吹き裏返へす葛の葉のうらみても猶恨めしきかな

讀人しらず

秋といへばよそにぞ聞きしあた人の我を古るせる名にこそありけれ

忘らるゝ身を宇治橋の中絶えて人も通はぬ年ぞ經にける

〔又は、こなたかなたに人も通はす〕

坂上是則

逢ふ事を長柄の橋のながらへて戀ひわたるまに年ぞ經にける

友則

憂きながら消ぬる涙ともなりなゝむ流れてとだに頼まれぬ身は

讀人しらず

流れては妹背の山の中に落つる吉野の川のよしや世の中

卷十五 終

卷十六

哀傷歌

小野篁朝臣

妹の身まかりける時詠める

泣く涙雨と降らなむ三途川水まさりなば歸り來るがに

素性法師

前太政大臣を白川のあたりに送りける夜詠める

血の涙落ちてぞたぎつ白川は君が世までの名にこそありけれ

僧都勝延

堀川の太政大臣身まかりにける時に、深草の山になさめてける後に詠みける

空蟬は骸を見つゝもなぐさめつ煙だに立て深草の山

上野峯雄

深草の野べの櫻も心あらば今年ばかりは墨染に咲け

藤原敏行朝臣の身まかりにける時に、詠みてかの家に遣はしける　紀友則

寢ても見ゆ寢でも見えけり大方は空蟬の世ぞ夢にはありける

あひ知れりける人の身まかりにければ詠める　紀貫之

夢とこそいふべかりけれ世の中を現(うつつ)ある物と思ひけるかな

あひ知れりける人の身まかりにける時に詠める　壬生忠岑

寢(ね)るが内に見るをのみやは夢と言はむはかなき世をも現とは見ず

姉のみまかりける時に詠める

瀬をせけば淵となりても淀みけり別をとむる柵(しがらみ)ぞなき

藤原の忠房が昔あひ知りて侍りける人の身まかりける時に、弔ひに遣はすとて詠める　閑院

先だゝぬ悔の八千たび悲しきは流るゝ水のかへり來ぬなり

紀友則が身まかりける時詠める　貫之

明日知らぬ我身と思へど暮れぬ間の今日は人こそ悲しかりけれ

時しもあれ秋やは人の別るべきあるを見るだに戀しき物を　忠岑

母が忌中(おもひ)にて詠める

神無月時雨に濡るゝ紅葉(もみぢは)はたゞ佗人の袂なりけり　凡河内躬恒

父がおもひにて詠める

藤衣はづるゝ糸は君戀ふる涙の玉の緒とぞなりける　忠岑

おもひに侍りける年の秋、山寺へまかりける路にて詠

貫之

める

朝露のおくての山田假初に憂き世の中を思ひけるかな

おもひに侍りける人を弔ひにまかりて詠める　忠岑

墨染の君が袂は雲なれや絶えず涙の雨さのみ降る

女の親の思にて山寺に侍りけるを、ある人の弔ひ遣はせりければ返事に詠める　讀人しらず

足曳の山邊に今はすみ染の衣の袖の干る時もなし

諒闇の年、池のほとりの花を見て詠める　篁朝臣

水の面にしづく花の色明にも君がみ影の思はゆるかな

深草の帝の御國忌の日詠める　文屋康秀

草深き霞の谷に影かくし照る日の暮れし今日にやはあらぬ

深草の帝の御時に、藏人の頭にて、夜書馴れ仕うまつりけるを諒闇に成りにければ、更に世にも交らずして、比叡の山に登りて頭おろしてけり、その又の年、みな人、御裏服ぬぎて、あるはかうぶり給はりなど、よろこびけるを聞きて詠める　僧正遍昭

皆人は花の衣になりぬなり苔の袂よ乾きだにせよ

河原のおほいまうち君の身まかりての秋、かの家のあたりをまかりけるに、紅葉の色まだ深くもならざりけるを見て、かの家に、詠みていれたりける　近院右のおほいまうち君

打つけに淋しくもあるか紅葉も主なき宿は色なかりけり

藤原のたかつれの朝臣の身まかりての又の年の夏、ほとゝぎすの鳴きけるを聞きて詠める　貫之

郭公今朝鳴く聲におどろけば君に別れし時にぞありける

櫻を植ゑてありけるに、漸く花咲きぬべき時に、かの植ゑける人身まかりにければ、その花を見て詠める　紀望行

花よりも人こそ仇になりにけれ何れを先に戀ひむとか見し

あるじ身まかりにける人の家の梅のはなを見て詠める　貫之

色も香も昔の濃さに匂へども植ゑけむ人の影ぞ戀ひしき

河原の左大臣の身まかりて後、かの家にまかりてありけるに、鹽竈（しほがま）といふ所のさまを作れりけるを見て詠める

君まさで煙絶えにし鹽竈のうら淋しくも見え渡るかな

藤原の利基（としもと）の朝臣の、右近中將にて、住み侍りける曹司の、身まかりて後、人も住まずなりにけるに、秋の夜更けて物より詣でくるついでに、見いれければ、もとありし前栽、いと茂く荒れたりけるを見て、早くそこに侍りければ昔を思ひやりて詠みける　御春有助

君が植ゑしひとむら薄虫の音のしげき野べともなりにけるかな

惟喬の親王の、父の侍りけむ時に詠めりけむ歌ど
もと請ひければ、書きて送りける奥に詠みて書け
りける

友則

ことならば言の葉さへも消えなゝむ見れば涙のたきまさりけり

題しらず　讀人しらず

なき人の宿にかよはゝ郭公かけて音にのみ鳴くと告げなむ

誰見よと花咲けるらむ白雲の立つ野と早くなりにし物を

式部卿の親王閑院の五のみこにすみわたりけるを、
いくばくもあらで、女みこの身まかりにける時に、
かのみこのすみける帳のかたびらのひもに、ふ
みを結ひつけたりけるを取りて見れば、昔の手に

て此歌をなむ書きつけたりける

數々に我を忘れぬものならば山の霞を哀れとは見よ

男の、人の國にまかりける間に、女、俄に病をし
て、いと弱くなりにける時、詠み置きて身まかり
にける　讀人しらず

聲をだに聞かで別るゝ魂よりもなき床に寢む君ぞ悲しき

病にわづらひ侍りける秋、心地のたのもしげなく
覺えければ、詠みて人のもとにつかはしける　大江千里

紅葉を風にまかせて見るよりもはかなきものは命なりけり

みまかりなむとて詠める　藤原これもと

露をなど仇なるものと思ひけむ我が身も草に置かぬばかりを

病して弱くなりにける時詠める　　業平朝臣

終にゆく路とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを

甲斐の國に、あひ知りて侍りける人とぶらはむとてまかりける道中にて、俄に病をして、いまくとなりにければ、詠みて京にもてまかりて、母に見せよといひて、人に告げ侍りける歌　　在原滋春

假初のゆきかひ路とぞ思ひ來し今は限の門出なりけり

卷十六 終

卷十七

雜歌上

題しらず　　讀人しらず

我上に露ぞおくなる天の川と渡る船の櫂の雫か

思ふどち圓居せる夜は唐錦たゝまく惜しき物にぞありける

嬉しきを何に包まむ唐衣袂ゆたかに裁てといはましを

限なき君がためにと折る花は時しも分かぬ物にぞありける

〔ある人の曰く、此歌は前の大臣のなり。〕

紫の一本ゆゑに武藏野の草は皆がらあはれとぞ見る

めの妹をもて侍りける人に袍を贈るとて、　　業平朝臣

詠みて遣りける

紫の色濃き時は目もはるに野なる草木ぞ分れざりける

大納言藤原國常の朝臣、宰相より中納言になりける時に、染めぬ袍の綾を贈るとて詠める　近院の右大臣

色なしと人や見るらむ昔より深き心に染めてしものを

石上（いそのかみ）並松が宮仕へもせで、いその上といふ所にこもり侍りけるを、俄にかうぶり給はれりければ、喜びいひつかはすとて詠みて遣はしける　布留今道

日の光蔵し別かれば石上古りにし里に花も咲きけり

二條の后の、まだ東宮の御息所と申しける時に、大原野に詣で給ひける日詠める　業平朝臣

大原や小鹽の山も今日こそは神代の事も思ひ出づらめ

五節の舞姫を見て詠める　良岑宗貞

天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ少女の姿しばしとゞめむ

五節の朝に、かんざしの玉の落ちたりけるを見て、誰がならむと、とぶらひて詠める　河原の左大臣

ぬしや誰問へど白玉いはなくにさらばなべてやあはれと思はむ

寛平御時に、うへのさふらひに侍りける男ども、瓶（かめ）を持たせて、后の宮の御方に、大御酒（おほみき）の下ろしと、聞えに奉りたりけるを、藏人ども笑ひて、瓶を御前（おまへ）にもて出でて、ともかくもいはずなりにければ、使の歸り來て、さなむありつるといひけれ

ば、藏人のなかに送りける　　敏行朝臣

玉垂の小瓶や何ちこよろぎの磯の涙分け沖に出にけり

女どもの見て笑ひければ詠める　　兼藝法師

形こそみ山隱れの朽木なれ心は色になさばなりなむ

方違に人の家にまかれりける時に、あるじの衣を着せたりけるを、朝に返すとて詠みける　　紀友則

蟬の羽の夜の衣は薄けれど移り香濃くも匂ひぬるかな

題しらず　　讀人しらず

遲く出る月にもあるかな足曳の山の彼方も惜しむべらなり

わが心なぐさめかねつ更科や姨捨山に照る月を見て　　業平朝臣

大方は月をも愛でじこれぞこの積れば人の老とあるもの

月面白しとて、凡河内躬恒がまうで來りけるに、詠める　　紀貫之

かつ見れど疎くもあるかな月影の至らぬ里もあらじと思へば

池に月の見えけるを詠める

二つなき物と思ひしを水底に山の端ならで出づる月影

題しらず　　讀人しらず

あまの川雲の水脈にて早ければ光止めず月ぞ流るゝ

飽かずして月の隱るゝ山もさはあなたおもてぞ戀しかりける

惟喬のみこの狩しける供にまかりて、やどりに歸りて、夜ひとよ酒を飲み物語をしけるに、十一日の月も隱れなむとしける折に、みこ醉ひて內に入

りなむとしければ、詠み侍りける　業平朝臣

飽かなくにまだきも月の隱るゝか山の端遁げて入れずもあらなむ

田村の帝の御時に、齋院に侍りける、あきらけい

このみこを、母あやまちありといひて、齋院をか

へられむとしけるを、其事やみにければ詠める　あま敬信

大空を照りゆく月し清ければ雲隱せども光り消なくに

題しらず　讀人しらず

石の上古から小野の本柏もとの心は忘られなくに

古の野中の清水ぬるけれどもとの心を知る人ぞ汲む

古の倭文の苧環賤しきも良きも盛はありしものなり

今こそあれ我も昔は男山さかゆく時もあり來しものを

世の中に古りぬるものは津の國の長柄の橋と我となりけり

笹の葉に降り積む雪の末を重み本くだちゆく我が盛はも

大荒木の森の下草老いぬれば駒もすさめず苅る人もなし

〔又はさくらあさのをふの下草おいぬれば〕

數ふれば止まらぬ物を年といひて今年はいたく老いぞしにける

押照るや難波のみつに燒く鹽の辛くも我は老いにけるかな

〔又は、おほさものみつの濱べに〕

老ゆらくの來むと知りせば門鎖してなしと答へて逢はざらましを

〔此三の歌は、昔ありけるみたりの翁のよめるとなむ。〕

さかさまに年も行かなむ取りも敢へず過ぐる齡や共に返ると

取止むる物にしあられば年月をあはれあな憂と過ぐしつるかな

留めあへずうべもとしとは言はれけりしかも情なく過ぐる齡か

鏡山いざ立よりて見て行かむ年經ぬる身は老いやしぬると

〔此歌はある人曰く大伴の黒主がおり。〕

業平朝臣の母のみこ長岡に住み侍りける時に、業平宮仕へすとて、時々もえまかりとぶらはずはべりければ、十二月ばかりに母のみこのもとより、とみの事とて、文をもてまうできたり。あけて見れば、言葉はなくて、ありける歌

老いぬればさらぬ別のありといへばいよ〳〵見まくほしき君哉

業平朝臣

かへし

世の中にさらぬ別のなくもがな千代もと歎く人の子のため

在原棟梁

寛平御時、后の宮の歌合の歌

白雪の八重降りしける還山かへる〳〵も老いにけるかな

同じ御時、うへのさふらひにて、をのこどもに、大御酒給ひて、大御遊ありけるついでにつかうまつれる

敏行朝臣

老いぬとてなどか我が身を責きけむ老いずは今日に逢はましものか

題しらず　讀人しらず

千早振る宇治の橋守汝をしぞ哀れとは思ふ年の經ぬれば

我れ見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松幾世經ぬらむ

住吉の岸の姫松人ならば幾代か經しと問はましものを

梓弓磯邊の小松誰が世にか萬代かけて種を蒔きけむ

〔此歌は或人の曰く、柿本人麿がおり。〕

斯くしつゝ世をや盡くさむ高砂の尾上に立てる松ならなくに

藤原興風

誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに　讀人しらず

わたつ海の沖つ潮合に浮ぶ沫の消えぬ物から寄る方もなし

わたつ海の簪に挿せる白妙の涙もて結へる淡路島山

和田の原寄せ來る涙のしば〳〵も見まくのほしき玉津島かも

難波潟潮滿ち來らし雨衣田簑の島に鶴鳴き渡る

貫之が和泉の國に侍りける時に、大和より越えまうで來て、詠み遣しける　藤原忠房

君を思ひ沖津の濱に鳴く鶴の尋ね來ればぞありとだにきくかへし　貫之

沖津浪高師の濱の濱松の名にこそ君を待ち渡りつれ

難波にまかれりける時詠める

難波潟生ふる玉藻を假初の蜑とぞ我は成りぬべらなる

あひ知れりける人の住吉に詣でけるに、詠みて遣しける　壬生忠岑

住吉と蜑は告ぐとも長居すな人忘草生ふといふなり

難波へまかれりける時、田簑の島にて雨に逢ひて詠める　貫之

雨により田簑の島を今日行けば名には隱れぬ物にぞありける

法皇、西川におはしましたりける日、鶴、洲にたてりといふ事を題にて詠ませ給ひける

葦鶴のたてる川邊を吹く風に寄せて返へらぬ涙かとぞ見る

中務のみこの家の池に船を作りて、下し初めて遊びける日、法皇御覽じにおはしましたりけり。夕さ

りつ方歸りおはしまさむとしける折に詠みて奉りける　伊勢

水の上に浮べる船の君ならばこゝぞ泊といはましものを

唐琴といへる所にて詠める　眞性法師

都まで響通へるからごとは波の緒結げて風ぞひきける

布引の瀧にて詠める　在原行平朝臣

扱き散らす瀧の白玉拾ひ置きて世の憂き時の涙にぞ借る

布引の瀧のもとにて人々集まりて歌詠みける時に詠める　業平朝臣

拔き亂る人こそあるらし白玉の間なくも散るか袖の狹きに

吉野の瀧を見て詠める　承均法師

誰がために引きて晒せる布なれや世を經て見れど取る人もなき

題しらず　神代法師

落瀧の瀬々の白糸繰りためて山分衣織り來ましを

龍門に詣でゝ瀧のもとにて詠める　伊勢

裁ち縫はぬ衣著し人も無きものを何山姫の布晒すらむ

朱雀院の帝布引の瀧御覽ぜむとて、七月の七日の日おはしましてありける時に、侍らふ人々に歌詠ませ給ひけるに詠める　橘長盛

主なくて晒らせる布を棚機に我が心とや今日は借さまし

比叡の山ある、音羽の瀧を見て詠める　忠岑

落ちたぎつ瀧の水上年積り老いにけらしな黑き筋なし

同じ瀧を詠める　躬恒

風吹けど處も去らぬ白雲は世を經て落つる水にぞありける

田村の御時に、女房のさふらひにて、御屏風の繪御覽じけるに瀧落ちたりける所面白し。是を題にて歌詠めと、さふらふ人に仰せられければ、詠める

三條の町

おもひせく心のうちの瀧なれやおつとは見れどおとのきこえぬ

屏風の繪ふる花を詠める　貫之

咲き初めし時より後はうちはへて世は春なれや色の常なる

屏風の繪に詠み合せて、書きける　坂上是則

苅りて干す山田の稻の扱き垂れて鳴きこそ渡れ秋の憂ければ

卷十七 終

卷十八

雜歌下

題しらず　讀人しらず

世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる

いくばくもあらじ我が身をなぞもかく蜑の刈る藻に思ひ亂るゝ

雁の來る峯の朝霧晴れずのみ思ひ盡させぬ世の中の憂さ　小野篁朝臣

然りとて背(そむ)かれなくに事しあればまづ歎かれぬあな憂(う)世の中

甲斐の守に侍りける時、京へまかりのぼりける人に遣しける　小野貞樹

都人如何にと問はゞ山高み馴れぬ雲井に侘ぶと答へよ

文屋の康秀が三河の掾に成て、縣見には得出でたゝ

じやといひやれりける返事に詠める　小野小町

侘ぬれば身をうき草の根を絶えて誘ふ水あらば往なむとぞ思ふ

題しらず

哀れてふことこそうたて世の中を思ひ離れぬ羈絆なりけれ　讀人しらず

哀れてふ言の葉ごとに置く露は昔を戀ふる涙なりけり

世の中の憂きもつらきも告げなくにまづ知るものは涙なりけり

世の中は夢か現か現とも夢とも知らず有りて無ければ

世の中に何ら我身の有りてなし哀とやいはむあな憂とやいはむ

山里は物の侘しき事こそあれ世の憂きよりは住みよかりけり

惟喬親王

白雲の絶えず棚引く嶺にだに住めば住みぬる世にこそありけれ

知りにけむ聞きても厭へ世の中は涙の騒ぎに風ぞしくめる　布留今道

何處にか世をば厭はむ心こそ野にも山にも迷ふべらなれ　素性

世の中は昔よりやは憂かりけむ我身一つのためになれるか　讀人しらず

世の中を厭ふ山邊の草木とやあなうの花の色に出でにけむ

み吉野の山の彼方に宿もがな世の憂き時の隱所にせむ

世に經れば憂さこそまされみ吉野の岩の蔭道蹈み馴らしてむ

いかならむ岩ほの中に住まばかは世の憂き事の聞え來ざらむ

足曳の山のまに〳〵隱れなむ憂き世の中はあるかひもなし

世の中の憂けくに飽きぬ奥山の木の葉に降れる雪や消なまし

物部良名

同じ文字なき歌

世の憂きめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそ絆なりけれ

山の法師の許へ遣しける

凡河内躬恒

世を捨てゝ山に入る人山にても猶憂き時は何地行くらむ

物思ひける時、幼おき子を見て詠める

今更に何生ひ出づらむ竹の子のうきふし繁き世とは知らずや

題しらず

讀人しらず

世に經れば言の葉繁き吳竹のうきふしごとに鶯ぞ鳴く

木にもあらず草にもあらぬ竹の節の端に我身は成ぬべらふり

〔或人の曰く、高津の皇子の歌なり。〕

我身から憂き世の中と歎きつゝ人のためさへ悲しかるらむ

隱岐の國に流されり侍りける時に詠める

篁朝臣

思ひきや鄙の別におとろへて海士の縄手繰漁せむとは

田村の御時に事にあたりて津の國の須磨といふ所に籠り侍りけるに、宮のうちに侍りける人に遣しける

在原業平朝臣

わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻鹽垂れつゝ侘ぶと答へよ

左近將監解けてけりける時に、女のとふらひにおこせたりける返事に詠みて遣しける

小野春風

天彦の音づれしとぞ今は思ふ我か人かと身をたどる世に

官さけて侍りける時詠める

平貞文

憂世には門鎖せりとも見えなくになどか我が身の出でがてにする

有り果てぬ命待つ間の程ばかり憂き事繁く思はずもがな

みこの宮の帯刀に侍りけるを宮仕へつかへまつらずとて、解けて侍りける時に詠める　宮道清樹

筑波嶺の木の下ごとに立ちぞよる春のみ山の蔭を戀ひつゝ

時なりける人の俄に時なくなりて歎くを見て、みづからの歎もなく喜もなきことを思ひて詠める　清原深養父

光無き谷には春もよそなれば咲きて疾く散るもの思ひもおし

桂に侍りける時に七條中宮の訪はせ給へりける御かへり事に奉りける　伊勢

久方の月の桂の里なれば光をのみぞ頼むべらなる

紀利貞が阿波の介にまかりける時に、馬のはなむけせむとて、今日といひおくれりける時にこゝかしこにまかり歩りきて、夜更くるまで見えざりければ遣しける　業平朝臣

今ぞ知る苦しきものと人待たむ里をば離れず訪ふべかりけり

惟喬親王の許にまかり通ひけるを、頭おろして小野といふ所に侍りけるに、正月にとぶらはむとてまかりたりけるに、比叡の山の麓なりければ、雪いと深かりけり。強ひて彼の庵室にまかり至りて拝みけるに、徒然としていと物悲しくて歸りきうで來て、詠みて送りける

忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪踏み分けて君を見むとは

深草の里に住み侍りて、京へまうで來とて、其處

ふりける人に詠みて贈りける

年を經て住み來(こ)し里を出でゝ去なばいとゞ深草野とや成りなむ

かへし　讀人しらず

野とならば鶉と鳴きて年は經むかりにだにやは君の來ざらむ

題しらず

我を君難波の浦に有りしかば憂きめを三津の海士となりにき

〔此歌は或人、昔男ありける女の男訪はずなりにければ、難波の三津の寺にまかりて尼になりて、詠みて男に遣はせりけるとなむいへる。〕

かへし

難波潟恨むべき間も思ほえず何處(いづく)を三津の海士とかはなる

今更にとふべき人も思ほえず八重し葎(むぐら)して門させりてへ

友達の久しくまうで來ざりけるもとに、詠みて遣はしける　躬恒

氷の面に生ふる五月(さつき)の浮草の憂き事あれや根を絶えて來(こ)ぬ

人をとはで久しうありける折に、あひ恨みければ、詠める

身を捨てゝ行きやしにけむ思ふより外なるものは心なりけり

宗岳大頼が越よりまうで來たりける時に、雪の降りけるを見て、おのがおもひは此雪の如くなむ積れるといひける折に詠める

君が思ひ雪と積らば頼まれず春より後はあらじゝ思へば

かへし　宗岳大頼

君をのみ思ひ越路の白山(しらやま)はいつかは雪の消ゆる時ある

越なりける人に遣しける　紀貫之

思ひやる越の白山知られども一夜も夢に越えぬ夜ぞなき

題しらず　讀人しらず

いざ此處に我が世は經なむ菅原や伏見の里の荒れまくも惜し

我庵は三輪の山本戀しくば訪らひ來ませ杉立てる門

我庵は都の巽しかぞ住む世を宇治山と人はいふなり　喜撰法師

荒れにけりあばれ幾世の宿なれや住みけむ人の音づれもせぬ　讀人しらす

奈良へまかりける時に荒れたる家に女の琴彈きけるを聞きて詠みていれたりける　良岑宗貞

侘び人の住むべき宿と見るなべに歎き加はる琴の音ぞする

初瀬に詣づる道に奈良の京に宿れりける時詠める　二條

人古する里を厭ひて來しかども奈良の都も憂き名なりけり

題しらず　讀人しらす

世の中は何れかさして我がならむ行き止るをぞ宿と定むる

逢坂の嵐の風は早けれど行方知られぬ侘びつゝぞ經る

風の上に在處定めぬ塵の身は行方も知らずなりぬべらなり　伊勢

家を賣りて詠める

飛鳥川淵にもあらぬ我が宿も瀬に變り行く物にぞありける

筑紫に侍りける時に、まかり通ひつゝ碁打ちける人の許に京に歸りまうできて、遣しける　紀友則

古郷は見し如もあらず斧の柄の朽ちし處ぞ戀しかりける

女友達と物語して別れて後に遣しける陸　奥

厭かざりし袖の中にや入りにけむ我が魂のなき心地する

寛平御時に唐土判官に召されて侍りける時に、

東宮のさふらひにて、たのこども酒たうべけるつ

いでに詠み侍りける　藤原忠房

弱竹のよ長き上に初霜のおき居て物を思ふ頃かな

題しらず　讀人しらず

風吹けば沖津白浪龍田山夜半にや君が獨越ゆらむ

〔或人、此歌は昔、大和の國なりける人の女に或人すみわたりけり。此女親もなくなりて、家もわろくなり行く間に、此男河内の國に人をあひしりて通ひつゝ、離れやうにのみなりゆきけり

さりけれども、つらげなるけしきも見えで、河内へ行く毎に、男の心の如くにしつゝ、出し遣りければ、あやしと思ひて、もしなき間に異心もやあると、疑ひて、月の面白かりける夜、河内へ行くまねにて前栽の中に、隱れて見ければ、夜更くるまで琴を搔鳴らしつゝ、打歎きて、此歌を詠みて寢にければ、これを聞きてあはれと思ひて、夫より又外へもまからずなりにけりとなむいひ傳へたる。〕

誰が禊木綿付け鳥か唐衣立田の山にをりはへてなく

わすられむ時しのべとぞ濱千鳥ゆくへもしらぬ跡をとゞむる

眞觀御時、萬葉集はいつばかり作れるぞと問はせ給ひければ、詠みて奉りける　文屋有季

神無月時雨降り置けるかなの葉の名に負ふ宮の古言ぞこれ